岡山県埋蔵文化財発掘調査報告122

下笠加遺跡

県営邑久町圃場整備事業に伴う確認調査

1997

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告122

下笠加遺跡

県営邑久町圃場整備事業に伴う確認調査

1997

岡山県教育委員会

序

本報告書には、邑久郡邑久町下笠加に所在する下笠加遺跡の確認調査結果を収載しました。

この確認調査は、県営邑久町圃場整備事業に先だって埋蔵文化財の保護、保存の資料を得て、圃場整備事業との調整を図るため、平成８年度国庫補助事業として行われたものです。

調査の結果、下笠加遺跡では、旧河道をはさんで三地区で古い微高地の所在を確認しました。そして、それぞれの微高地で弥生時代および中世を中心とした集落跡を確認することができました。集落跡からは住居跡や井戸などの多くの遺構が検出され、また、弥生時代から中世に至る遺物が出土しました。特に、竪穴住居跡からは、多くの弥生土器とともに、サヌカイト製の石器および剥片が多数出土しました。このことから、弥生時代中期に、この住居でサヌカイト製の石器がつくられていたことがわかりました。

これらの成果を収めた本報告書が、文化財の保護、保存のために活用され、また、地域の歴史を研究する資料として役立てていただければ幸いと存じます。

最後に発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員の先生方をはじめ、邑久町及び地元関係各位から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成９年３月

岡山県教育委員会
教育長　森　崎　岩之助

例　言

1．本書は、岡山県教育委員会が、邑久郡邑久町下笠加における県営圃場整備事業に伴い、平成８年度国庫補助を受けて実施した下笠加遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡は、邑久郡邑久町下笠加ほかに所在する。

3．発掘調査にあたっては、文化庁の西田健彦文化財調査官、専門委員の近藤義郎（岡山大学文学部名誉教授、岡山県文化財保護審議会委員）・水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）の各氏から指導・助言を受けた。

4．発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター職員金田善敬が担当し、専門委員の指導、助言のもとに、平成８年11月11日から平成９年１月21日まで実施した。

5．発掘調査にあたっては、邑久町役場、邑久町教育委員会、地権者等関係各位から多大な援助を受けた。

6．本書の作成は金田が行った。

7．本書に使用したレベルの数値は海抜高である。方位は第１・２・３・27図が真北、他は磁北である。

8．本書第２図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図（備前瀬戸、西大寺）を複製したものである。

9．出土遺物、実測図、写真等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

本　文　目　次

序
例　　言
目　　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査に至る経緯 …… 5
第３章　発掘調査の概要 …… 7
第４章　まとめ …… 25

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（黒丸印） …… 1
第２図　周辺遺跡分布図(1／25,000) …… 2
第３図　トレンチ位置図（1／5,000） …… 8
第４図　Ｔ１～Ｔ８断面図（1／80） …… 9
第５図　Ｔ９・Ｔ10平・断面図(1／80) … 10
第６図　Ｔ11～Ｔ14断面図（1／80） …… 10
第７図　Ｔ10・Ｔ14出土遺物（1／4） …… 11
第８図　Ｔ15・Ｔ16平・断面図(1／80) … 11
第９図　Ｔ17・Ｔ18平・断面図(1／80) … 12
第10図　Ｔ19断面図（1／80） …… 12
第11図　Ｔ20・Ｔ21平・断面図(1／80) … 13
第12図　Ｔ22～Ｔ24断面図（1／80） …… 13
第13図　Ｔ25平・断面図（1／80）
および出土遺物(1／4) …… 14
第14図　Ｔ26平・断面図（1／80）
および出土遺物(1／2) …… 14
第15図　Ｔ27平・断面図（1／80）
および出土遺物(1／4) …… 15
第16図　Ｔ28平・断面図（1／80）
および出土遺物(1／4) …… 16
第17図　Ｔ29平・断面図（1／80）
および出土遺物(1／4) …… 17
第18図　Ｔ30平・断面図（1／80）
および出土遺物(1／3・1／4) … 18
第19図　Ｔ30出土石器（1／2） …… 19
第20図　Ｔ30出土石器（1／2・1／3・1／4）
・鉄器（1／2） …… 20
第21図　Ｔ31平・断面図（1／80）
および出土遺物（1／4） …… 21
第22図　Ｔ32・33断面図（1／80） …… 21
第23図　Ｔ34～Ｔ37断面図（1／80） …… 22
第24図　Ｔ38平・断面図（1／80）
および出土遺物(1／4) …… 23
第25図　Ｔ39断面図（1／80） …… 24
第26図　Ｔ40平・断面図（1／80） …… 24
第27図　遺跡推定範囲図（1／10,000） …… 26

図 版 目 次

図版１－１．下笠加遺跡遠景（１）
（南東から我城山をのぞむ）
２．下笠加遺跡遠景（２）
（東から）
３．下笠加遺跡遠景（３）
（南から）
図版２－１．Ｔ10（北から）
２．Ｔ16（南から）
３．Ｔ25（東から）
図版３－１．Ｔ26（北から）
２．Ｔ27北壁断面（南から）
３．Ｔ30（北から）
図版４－１．Ｔ30 分銅形土製品
出土状況（西から）
２．Ｔ31（北から）
３．Ｔ38 井戸断面（南から）
図版５－１．Ｔ９（西から）
２．Ｔ18北壁断面（南から）
３．Ｔ19北壁断面（南から）
４．Ｔ20 溝（南から）
５．Ｔ28 土壙２（南から）
６．Ｔ30北壁断面（南から）
７．Ｔ40 土壙（南から）
８．作業風景（埋め戻し）
図版６ 土器（1／3）・土製品（1／2）
図版７ 石器（1／2）
図版８ 石器（1／2・1／3）・鉄器（1／2）

表 目 次

表１ トレンチ調査概要一覧表 …… 24
表２ 石器観察表 …… 27

第１章　地理的・歴史的環境

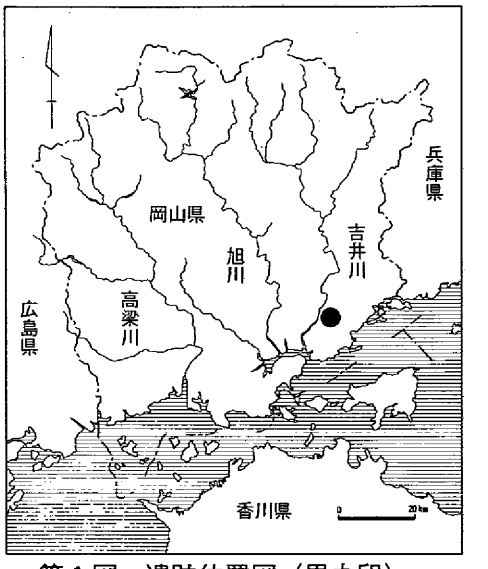
今回、確認調査を実施した「下笠加遺跡」は邑久郡邑久町下笠加に所在する。

邑久町は岡山県東部を流れる岡山県下三大河川の一つである吉井川東岸下流域に位置する。邑久町は行政区画の上では東西約17kmにおよぶ町であるが、東部と西部では大きく地形が異なる。邑久町東部は山がちな地形で、山間部に小さな平野が点在している。山間部には窯跡を中心とした遺跡が多く、長船町、備前市などとならんで一大古窯址群として著名である。また、邑久町西部は東部とは対象的に一般に千町平野といわれる広大な沖積平野が広がっている。千町平野は吉井川の沖積作用により、縄文時代から弥生時代のはじめにかけて徐々に形成されていったもので、それにともなって集落がいとなまれていったと考えられている。また、邑久町尾張を中心に条里遺構が広く残存し、現在にいたるまで、この吉井川東岸地域の中心的な役割を担ってきた。

今回調査した下笠加遺跡は、この千町平野の北部に位置する。周辺には多くの遺跡が分布しており、古くは旧石器時代にまでのぼる。旧石器時代の遺跡としては、才ノ峠遺跡（注１）、船原梶ケ端貝塚（注２）があげられ、ナイフ形石器が発見されている。また、邑久町周辺においても、長船町の西谷遺跡（注３）などで旧石器時代の遺物が採集されている。

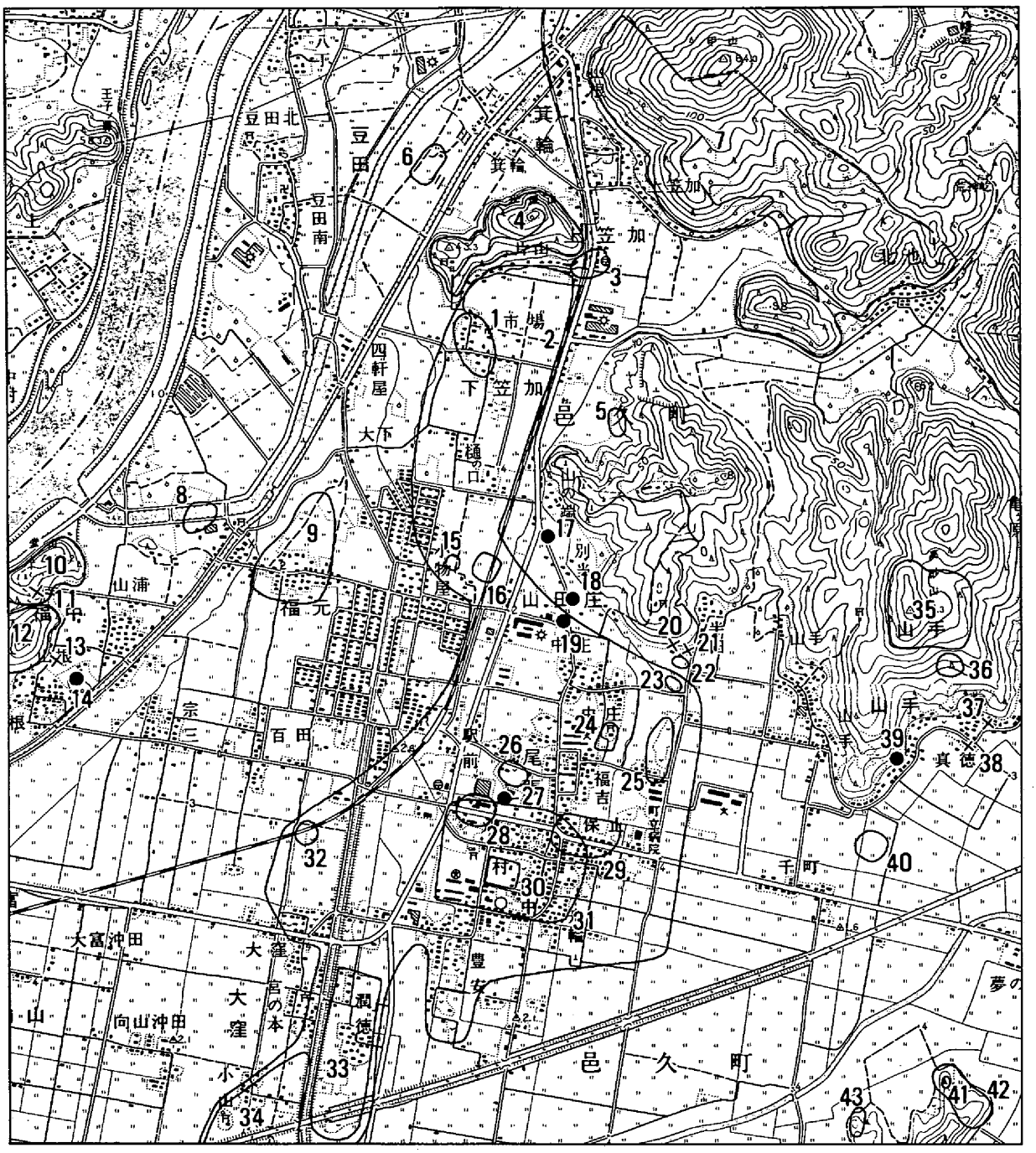
縄文時代になると、千町平野に向かってのびる尾根丘陵端部を中心に貝塚が形成される。その中で大橋貝塚は代表的な貝塚である。大橋貝塚は縄文時代前期の羽島下層式から後期の福田ＫⅡ式までの長期にわたりいとなまれた貝塚である。貝塚は古くから発掘調査が行われており、貝層の広がりも約3000㎡におよんでいたと考えられている（注４）。1978年に貝塚の東端部の発掘調査がおこなわれ（注５）、その結果、貝塚からはシジミ、カキ、ハイガイ等を中心とする貝類および獣骨の他、多く土器や石器が出土した。また、大橋貝塚から北東へ３kmほどはなれた丘陵上に位置する宮下貝塚では爪形文土器を含む縄文土器が採集されている（注６）。この宮下貝塚の近接する真徳貝塚Ｂ（注７）は、近年、調査がおこなわれ、縄文時代後期の土器の他に、ハイガイやシジミを中心とする貝類および骨片、炭化物が出土している。

弥生時代になると、吉井川の沖積作用により、現在の千町平野の中心部から弧状に自然堤防が形成され、この自然堤防に貝塚および集落が形成されはじめる。中でも門田貝塚（注８）は弥生時代の貝塚を中心に、土器・石器・骨角器・獣骨などが出土している。特に、多量に出土した弥生時代前期後半の土器は「門田式土器」と命名されており、弥生土器編年の指標になっている。また、近年では畑中遺跡（注９）、月ノ木遺跡（注10）、熊山田遺跡（注11）などの調査が行われており、弥生時代を中心とする遺構および遺物が確認されている。



第１図　遺跡位置図（黒丸印）

古墳時代には、邑久町周辺に鶴山丸山古墳（注12）、新庄天神山古墳（注13）や花光寺山古墳（注14）などの



1．下笠加遺跡
2．熊山田散布地
3．國城遺跡
4．我城山古墳群
5．南寺跡
6．箕輪下遺跡
7．甲山古墳群ほか
8．大山寺跡？
9．福元遺跡
10．福中堂山古墳群
11．大平山善興寺廃寺
12．福中宮山古墳群
13．散布地
14．山根古墳
15．サアナ寺跡
16．サアナ貝塚
17．月ノ木遺跡
18．辻畑遺跡
19．畑中遺跡
20．宮下遺跡
21．半田貝塚
22．半田散布地
23．半田前遺跡
24．品治遺跡
25．拝登遺跡
26．門田貝塚
27．歳森遺跡
28．堂免貝塚
29．水南遺跡
30．尾張助三畑遺跡
31．尾張城
32．百田散布地
33．潤徳遺跡
34．仁生田遺跡
35．高砂山古墳群
36．散布地（弥生）
37．真徳貝塚Ａ
38．真徳貝塚Ｂ
39．真徳古墳
40．真徳貝塚
41．扇ケ端貝塚
42．扇ケ端散布地
43．鳥博遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（1／25,000）

前期古墳が出現する。特に花光寺山古墳は全長約100mの前方後円墳であり、この地域では最大の規模をほこる。主体部には組合式長持形石棺をもち、三角縁三神三獣獣帯鏡をふくむ鏡や素環頭大刀などの鉄器が多数出土した。一方、古墳時代中期から後期になると千町平野周辺の丘陵を中心に古墳が形成され、我城山古墳群、甲山古墳群、福中堂山古墳群、福中宮山古墳群などの古墳群がいとなまれた。中でも、下笠加地区の北に位置する我城山古墳群（注15）の我城山６号墳では、刀剣、鉄鉾、鉄鏃、短甲、馬具など豊富な器種の遺物が出土した。

古代になると、この付近は律令体制下で備前国邑久郡と称され、中でも千町平野の中央に位置する尾張郷は、邑久郡内の中心的な役割を担うようになる。この尾張に位置する門田貝塚（注16）の発掘調査では、弥生時代の遺構とともに、古代の大規模な掘立柱建物の一部とみられる遺構が発見された。出土遺物の中には硯など官衙的な性格をうかがわせるものも含まれていたことから、郡衙あるいは郡衙に関連した施設である可能性がたかい。一方、古墳時代後半期からはじまった窯業生産は、古代以降、生産規模が拡大してくる。特に、邑久町、長船町、備前市などを中心に分布する古窯址群は、邑久古窯址群と称されており、古墳時代から奈良・平安時代にわたって県下最大の古窯址群であった。調査された窯跡例として、新林（宮畷）窯跡（注17）、寒風古窯址群（注18）、木鍋山１号窯（注19）があげられる。

中世になると、山陽道および吉井川の水運などの交通の要所として、邑久町周辺は繁栄の時期を迎える。中でも、邑久町に隣接している福岡を中心とした市は一遍上人絵伝にも紹介されている。このように、邑久町および吉井川沿岸の地域は中世交易の中枢を担うとともに、付近で生産される刀剣および備前焼などの生産活動と結びつき、経済的に西日本で屈指の町に成長した。そのことを示すかのように、尾張助三畑遺跡（注20）の発掘調査で報告されている井戸では、青磁、白磁、瓦器椀など、交易を通じてもたらされた土器類が発見されている。

今回、調査対象となった下笠加遺跡（注21）は千町平野の北部に位置する。北には古墳群の存在する我城山があり、西には吉井川の支流である干田川が流れている。現在、集落の位置する付近は、吉井川の運積する土砂によって形成された自然堤防上に位置し、その東側に後背低湿地（北池地区）をのこしている（注22）。下笠加地区は、近接する上笠加地区と合わせて、中世室町期には、笠賀荘という荘園であったとされる（注23）。現在では、この下笠加地区は大きくは、熊山田散布地に属している（注24）が、その後、当該地およびその周辺において幾度の調査がおこなわれ、弥生時代を中心とした集落跡の存在が明らかになってきた。その中で、1973年に下笠加地区の東部でおこなわれた工場造成による発掘調査（注25）では、弥生時代中期を中心とする遺物包含層が確認されている。また、下笠加遺跡の北に隣接する上笠加國城遺跡（注26）からは、古墳時代から奈良時代にかけての遺物包含層が確認されている。以上のような調査結果から、この付近には主に弥生時代を中心とする集落の存在がしられていた。

注

1：『瀬戸内海地域先土器時代遺跡地名表』　瀬戸内海歴史民俗資料館　1975

2：平井泰男『熊山田散布地ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告68　1988

3：福田正継『西谷遺跡』岡山県長船町教育委員会　1985

4：木村幹夫「岡山県邑久郡豊原貝塚について」『吉備考古』第90号　1955

木村幹夫「岡山県邑久郡大橋貝塚」『日本考古学年報』３　日本考古学協会　1955

「大橋貝塚」『邑久町の文化財』邑久町教育委員会　1986

５：岡本寛久『大橋貝塚発掘調査報告』邑久町教育委員会　1979

６：長瀬薫「邑久郡地方発見品ノ報告」『吉備考古』第36号　吉備考古会　1938

７：平井泰男『熊山田散布地ほか』（前掲注２）

８：鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』第84号　1952年

岡田博　『門田貝塚』　岡山県教育委員会　1983

９：平井泰男「畑中遺跡確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』12　1982

10：馬場昌一『月ノ木遺跡発掘調査概要』邑久町教育委員会　1983

11：福田正継ほか「熊山田遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14　1984

12：梅原末治「備前和気郡鶴山丸山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』３　1938

13：梅原末治「備前新庄天神山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』３　1938

14：梅原末治「備前行幸村花光寺山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』２　1937

15：近藤義郎ほか「岡山県邑久郡笠加村所在我城山古墳発掘調査報告」『瀬戸内海研究』３　1952

近藤義郎「備前邑久町我城山６号墳」『古代吉備』第６集　1969

16：岡田博　『門田貝塚』　岡山県教育委員会　1983

17：川崎務　伊藤晃ほか『新林（宮嶋）窯址の調査報告』邑久町教育委員会　1974

18：山磨康平ほか『寒風古窯址群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27　1978

19：江見正己「木鍋山遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』12　1982

江見正己「木鍋山一号窯」『岡山県史』考古資料　1986

20：平井勝「尾張助三畑遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』12 1982

馬場昌一「岡山県助三畑遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究№４』日本貿易陶磁研究会　1984

21：なお『全国遺跡地図　岡山県』（文化庁　1985年）では、下笠加遺跡として示されている箇所は、妙見宮下貝塚と称されているが、これは、今回の調査で下笠加遺跡の誤りであることが判明した。

22：喜多村俊夫ほか『農村の生活－岡山県邑久町笠加村北池－』瀬戸内海総合研究会　1951

23：『日本地名大辞典33　岡山県』角川書店　1989

24：『岡山県遺跡地図（第二分冊）』岡山県教育委員会　1974

『全国遺跡地図　岡山県』文化庁　1985

25：『大同機工株式会社工事現場埋蔵文化財包蔵地調査』㈱新井組　1973

26：『邑久町大字上笠加字國城125番の１　淳風トレーニングセンター建設に伴う埋蔵文化財確認調査概要』昭和57年　邑久町教育委員会

なお、國城遺跡は『岡山県遺跡地図（第二分冊）』（岡山県教育委員会　1974年）では、熊山田散布地内に位置されているが、これは誤りで、國城遺跡は熊山田散布地の北側に隣接する遺跡である。

第２章　調査に至る経緯

邑久郡邑久町下笠加において、県営圃場整備事業（担い手育成農業基盤整備事業）が計画されるのに伴い、岡山県教育委員会と東備地方振興局の間で、圃場整備事業予定地内において周知されている下笠加遺跡ほかの遺跡の取り扱いについて協議がおこなわれた。関係機関による協議の結果、これらの遺跡については、（１）工事着手前に確認調査を実施する、（２）調査の結果、重要な遺構等が発見された場合はその保存等について別途協議することになった。この協議結果にもとづき、岡山県教育委員会は、工事着手前に遺跡の規模、状況等を明らかにし、遺跡の保護・保存をはかるための基礎資料を得るため、平成８年度国庫補助を受けて確認調査を実施することになった。確認調査の対象地区は、熊山田散布地内に含まれる下笠加遺跡を中心とする範囲である。

調査は岡山県古代吉備文化財センターが実施した。確認調査期間は、平成８年11月11日から平成９年１月21日までである。

調査にあたっては、専門委員の指導・助言を得た。また、邑久町役場、邑久町教育委員会をはじめ地権者等関係各位からは多大な協力を得た。さらに調査に従事していただいた地元の方々にも協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

調査体制

岡山県教育委員会
- 教育長　森崎岩之助
- 教育次長　黒瀬定生

岡山県教育庁文化課
- 課　　長　大場　淳
- 課長代理　松井英治
- 参　　事　葛原克人
- 課長補佐（埋蔵文化財係長）平井　勝
- 主　　査　若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター
- 所　　長　河本　清
- 次　　長　高塚惠明
- 文化財保護参事　正岡睦夫

総務課
- 課　　長　丸尾洋幸
- 総務主幹　守安邦彦
- 課長補佐　井戸丈二
- 主　　査　木山伸一

調査第一課
- 課　　長　高畑知功
- 課長補佐　江見正己
- 主　　事　金田善敬（調査・報告書担当）

日誌抄

平成８年11月11日（月）	発掘資材搬入
11月15日（金）	Ｔ13・14・15・16・19実測・写真撮影終了
11月19日（火）	Ｔ８・９・10・20・21実測・写真撮影終了
11月22日（金）	Ｔ５・６・７・11・22実測・写真撮影終了
11月28日（木）	Ｔ１・２・３・４・12・18・24・27・28実測・写真撮影終了
12月２日（月）	埋め戻し開始
12月６日（金）	Ｔ17・32・35実測・写真撮影終了
	Ｔ１～４、Ｔ22埋め戻し終了
12月13日（金）	Ｔ33・34・36・37・39・40実測・写真撮影終了
12月17日（火）	埋蔵文化財専門委員会
12月18日（水）	文化庁技官現地視察
12月20日（金）	Ｔ19・29・32・34・36・37埋め戻し終了
12月26日（木）	Ｔ23・25・26・29・31・38実測・写真撮影終了
	Ｔ31・33・35・38・39埋め戻し終了
平成９年１月10日（金）	Ｔ11・12・17・20～28・40埋め戻し終了
１月14日（火）	Ｔ13～16・18埋め戻し終了
１月17日（金）	Ｔ５～10埋め戻し終了
平成９年１月20日（月）	Ｔ30実測・写真撮影終了
１月21日（火）	Ｔ30埋め戻し終了　発掘資材搬出

第３章　発掘調査の概要

〔１〕遺跡の位置と現状

今回、確認調査の対象となったのは、県営圃場整備事業の計画されている邑久郡邑久町下笠加を中心とする地域で、我城山の南から約40.1haが調査対象となる。この地域の大部分は、現状では水田として利用されているが、一部で宅地および工場の敷地として利用されている。

〔２〕発掘調査の方法と調査結果の概要

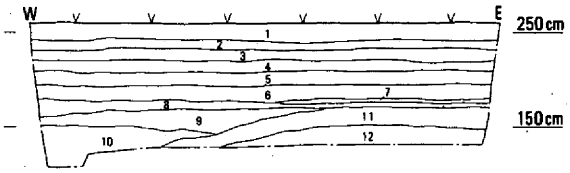
確認調査は圃場整備の影響をうける区域内にトレンチ（2×5m）を40箇所設定し（第３図）、遺構・遺物の確認を目的とし、土層観察、遺構検出および図面作成、写真撮影等をおこなった。以下に調査結果の概要を述べる。

Ｔ１～Ｔ４（第４図１～４）は我城山の南西部に位置する。Ｔ１およびＴ２は締まりのない粗砂が厚く堆積していた。また、Ｔ３およびＴ４ではトレンチの底付近に暗褐色を基調とする粘質土が堆積していた。いずれのトレンチにおいても、遺構は検出されず、また、遺物の出土量はわずかであった。このことから、Ｔ１およびＴ２付近はかつての河道に、またＴ３およびＴ４付近はよどんだ湿地に相当していたものと考えられる。

Ｔ５～Ｔ８（第４図５～８）は我城山の南に位置する。いずれのトレンチからも遺構は検出されず、また出土した遺物もわずかであった。Ｔ５はトレンチ上半部に撹乱をうけていた。Ｔ６はトレンチの深いところ（７層）から遺物が出土し、かつては低位部であったと推測される。また、Ｔ７およびＴ８では、トレンチの深いところで暗褐色を基調とする粘質土が堆積しており、Ｔ３およびＴ４同様、かつてはこの付近が低湿地であった可能性をしめしている。

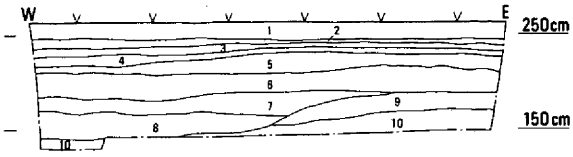
Ｔ９およびＴ10（第５図）は、下笠加地区の北東部に位置するトレンチであり、弥生時代以降の遺構が確認できた。Ｔ９では、表土下約40cm付近から弥生土器をふくむ遺物包含層（５層）を検出し、下層から柱穴等の遺構を確認した。遺構面はトレンチの中央付近で、西にむかって段をなしている。また、トレンチ内から、くぼみ状の「遺構」を検出した。いずれも人為的なものかどうかは不明である。また、Ｔ10では表土下約20cmから弥生時代の土壙および中世を中心とする時期の柱穴を確認した。土壙は２基が検出され、いずれも径１ｍほどで、埋土から多くの弥生土器片を検出した。特に、土壙２からは土器片とともに焼けた粘土塊や炭片およびサヌカイト片が出土した。図示した土器（第７図）で、１～３はいずれも弥生土器であり、土壙より出土した。このことから、土壙は弥生時代中期に属するものと考えられる。また、柱穴はトレンチ内で13本以上確認された。柱穴のいくつかは土壙と切り合い関係にあり、柱穴のほうが新しい遺構である。柱穴の中には、底に石を柱の根石のようにおいているものもあった。柱穴内から中世を中心とする土師質土器や須恵器が出土した。このことから、柱穴は中世のものと推測できる。また、遺構上面の包含層より古代の須恵器（４）が検出された。古代の遺物は、これより北に位置する上笠加國城遺跡でも確認されており、この周辺一帯に古代の遺構も存在している可能性がある。このように、Ｔ９およびＴ10では弥生時代から中世にかけての遺構が検出できた。このＴ９およびＴ10で検出された遺構面は先述したＴ１～８の砂質土層および粘質土層よりも高いレベルであることから、かつて、この付近が安定した微高地であったことがわかった。

第３図　トレンチ位置図（1／5,000）



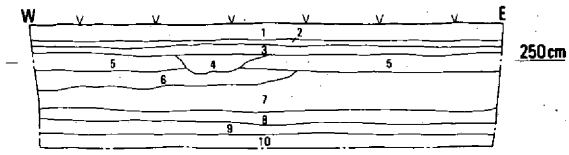
1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　灰黄色砂質土
4　暗黄灰色砂質土
5　黄褐色砂質土
6　暗黄灰色砂質土
7　淡灰色砂質土
9　灰色砂質土
10　青灰色砂質土
11　灰褐色砂質土
12　暗灰色砂質土

(1) T1



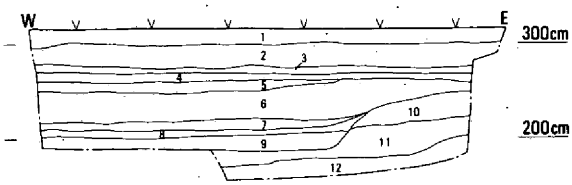
1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　黄灰色砂質土
4　灰色砂質土
5　褐灰色砂質土
6　暗灰褐砂質土
7　暗黄褐色砂質土
8　青灰色砂質土
9　黄褐色砂質土
10　暗灰色粘性砂質土

(2) T2



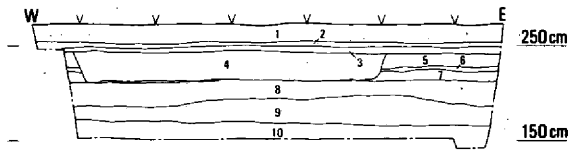
1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　灰色砂質土
4　褐灰色砂質土
5　灰黄色砂質土
6　褐色砂質土
7　暗黄褐色砂質土
8　黄灰色粘性砂質土
9　暗褐色粘質土
10　灰褐色粘質土

(3) T3



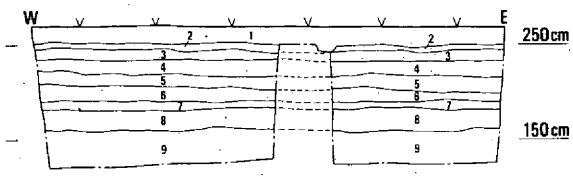
1　暗灰色粘質土
2　明黄灰色砂質土と
　黄橙色砂質土のまざり
3　褐色砂質土
4　灰黄色砂質土
5　黄灰色砂質土
6　黄褐色礫まじり砂質土
7　灰褐色粘質土
8　淡灰色粘質土
9　褐灰色粘質土
10　暗灰色粘質土
11　黄灰褐色粘質土
12　暗褐色礫まじり粘質土

(4) T4



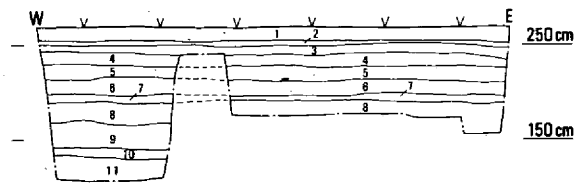
1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　黄灰色砂質土
4　暗褐色礫まじり砂質土(やられ)
5　黄灰色粘性砂質土
6　黄橙色砂質土
7　灰褐色粘性砂質土
8　灰色礫まじり粘質土
9　灰色粘質土
10　褐灰色粘質土

(5) T5



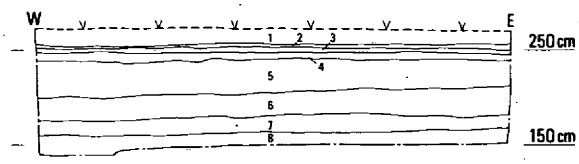
1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　黄灰色砂質土
4　明黄褐色砂質土
5　黄褐色砂質土
6　暗黄灰色粘性砂質土
7　褐灰色粘質土
8　灰色粘質土
9　灰褐色粘質土

(6) T6



1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　明黄褐色砂質土
4　黄灰色粘性砂質土
5　褐灰色粘性砂質土
6　暗黄灰色粘性砂質土
7　褐灰色粘性砂質土
8　灰色粘性砂質土
9　黄褐色粘性砂質土
10　暗褐色粘質土
11　灰褐色粘質土

(7) T7

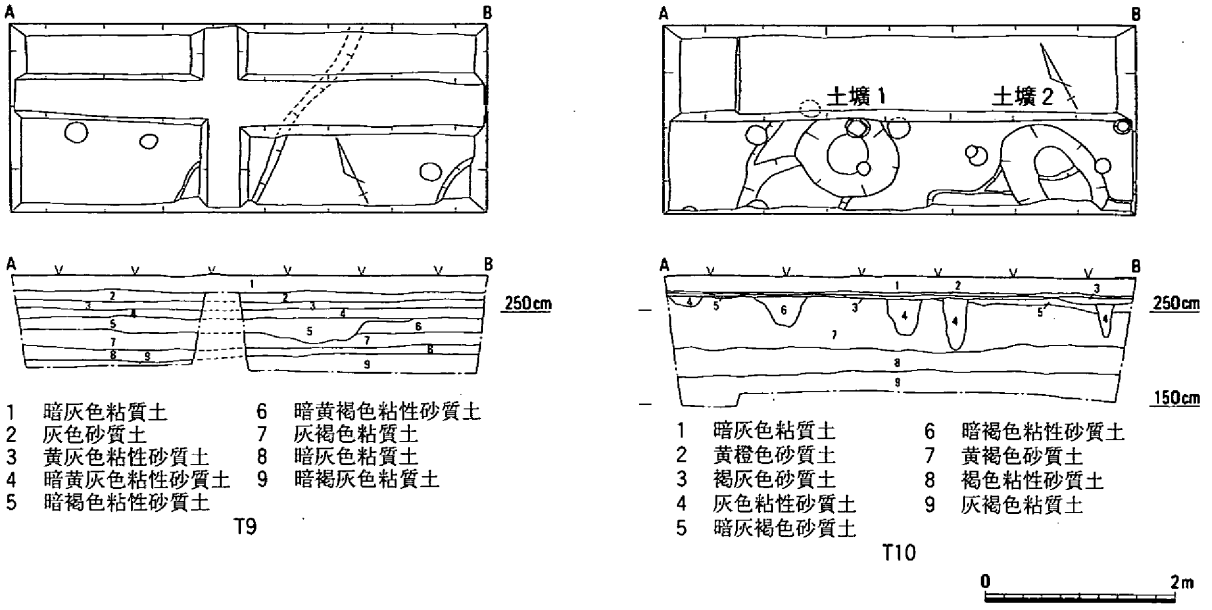


1　暗灰色粘質土
2　灰色砂質土
3　灰黄色砂質土
4　黄灰色粘性砂質土
5　暗黄灰色粘性砂質土
6　黄褐色粘性砂質土
7　暗褐色粘質土
8　灰褐色粘質土

(8) T8

0　2m

第４図　Ｔ１～Ｔ８断面図（1／80）



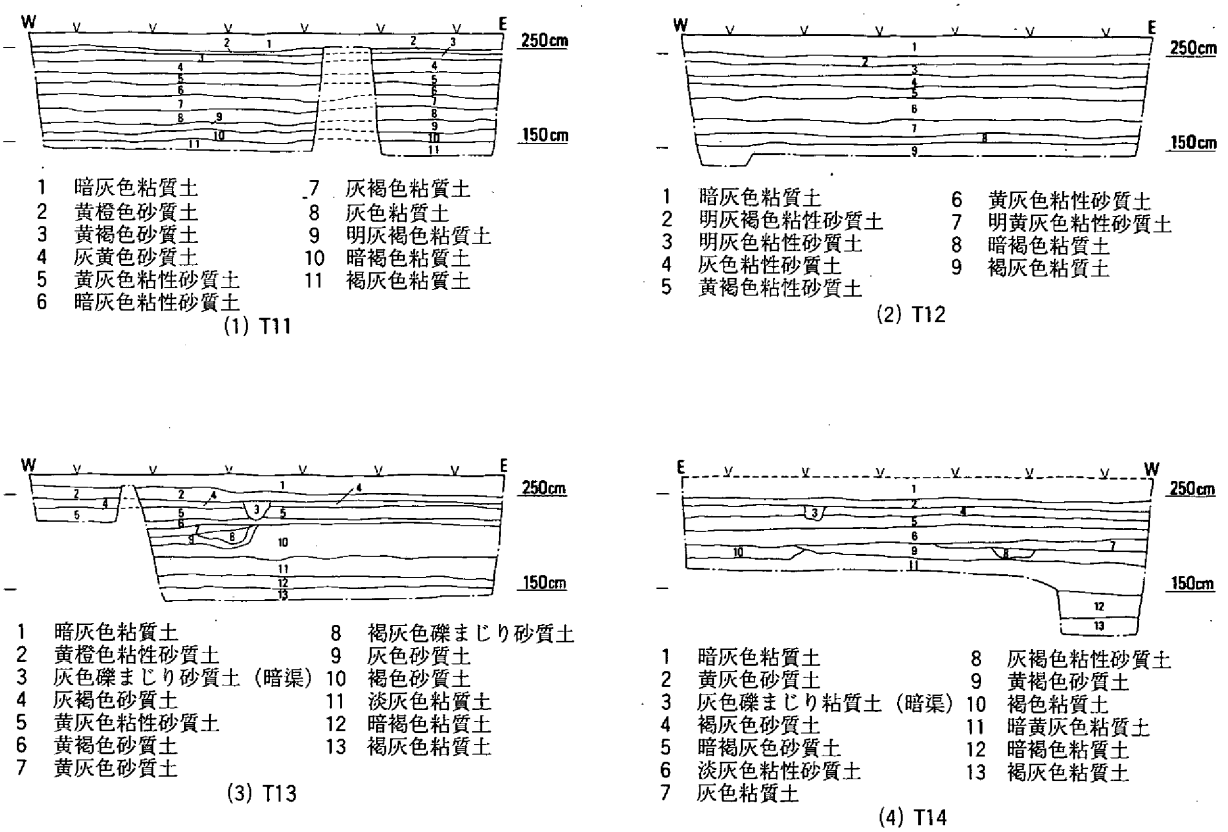
1　暗灰色粘質土
2　灰色砂質土
3　黄灰色粘性砂質土
4　暗黄灰色粘性砂質土
5　暗褐色粘性砂質土
6　暗黄褐色粘性砂質土
7　灰褐色粘質土
8　暗灰色粘質土
9　暗褐灰色粘質土

T9

1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　褐灰色砂質土
4　灰色粘性砂質土
5　暗灰褐色砂質土
6　暗褐色粘性砂質土
7　黄褐色砂質土
8　褐色粘性砂質土
9　灰褐色粘質土

T10

第５図　Ｔ９・Ｔ10平・断面図（1／80）



1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　黄褐色砂質土
4　灰黄色砂質土
5　黄灰色粘性砂質土
6　暗灰色粘性砂質土
7　灰褐色粘質土
8　灰色粘質土
9　明灰褐色粘質土
10　暗褐色粘質土
11　褐灰色粘質土

(1) T11

1　暗灰色粘質土
2　明灰褐色粘性砂質土
3　明灰色粘性砂質土
4　灰色粘性砂質土
5　黄褐色粘性砂質土
6　黄灰色粘性砂質土
7　明黄灰色粘性砂質土
8　暗褐色粘質土
9　褐灰色粘質土

(2) T12

1　暗灰色粘質土
2　黄橙色粘性砂質土
3　灰色礫まじり砂質土（暗渠）
4　灰褐色砂質土
5　黄灰色粘性砂質土
6　黄褐色砂質土
7　黄灰色砂質土
8　褐灰色礫まじり砂質土
9　灰色砂質土
10　褐色砂質土
11　淡灰色粘質土
12　暗褐色粘質土
13　褐灰色粘質土

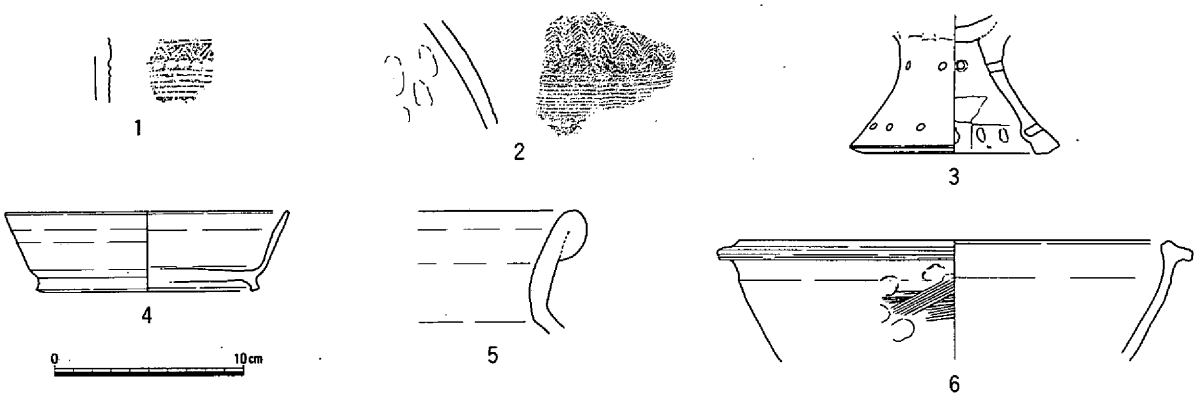
(3) T13

1　暗灰色粘質土
2　黄灰色砂質土
3　灰色礫まじり粘質土（暗渠）
4　褐灰色砂質土
5　暗褐灰色砂質土
6　淡灰色粘性砂質土
7　灰色粘質土
8　灰褐色粘性砂質土
9　黄褐色砂質土
10　褐色粘質土
11　暗黄灰色粘質土
12　暗褐色粘質土
13　褐灰色粘質土

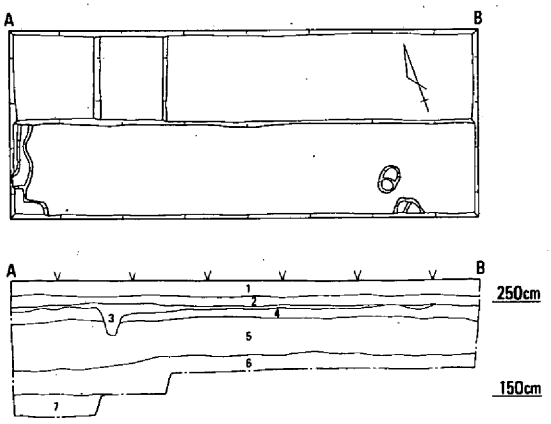
(4) T14

第６図　Ｔ11～Ｔ14断面図（1／80）

Ｔ11およびＴ12（第６図１・２）は、我城山から南西にのびる尾根の南に位置する。いずれのトレンチからも遺構は検出されず、また、出土した遺物もわずかであった。また、両トレンチ内からはＴ７およびＴ８で検出されたものと同じような暗褐色粘質土が検出され、この付近もかつては低湿地で

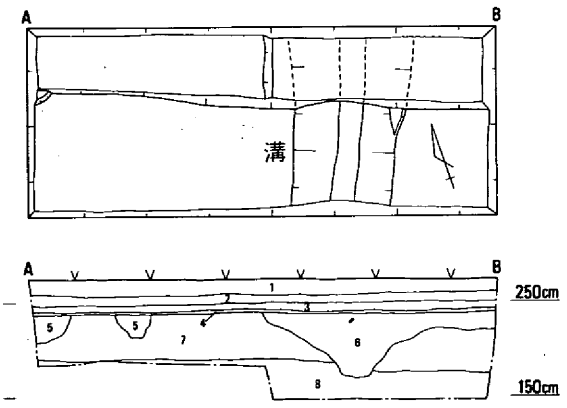


第７図　Ｔ10・Ｔ14出土遺物（1／4）



1　暗灰色粘質土
2　黄灰色粘性砂質土
3　暗褐色粘性砂質土
4　灰黄色粘質土
5　黄褐色粘性砂質土
6　灰褐色粘質土
7　灰色粘質土

T15



1　暗灰色粘質土
2　黄灰色粘性砂質土
3　灰色粘性砂質土
4　黄橙色粘性砂質土
5　暗褐色砂質土
6　灰褐色砂質土
7　黄褐色粘性砂質土
8　灰黄色砂質土

T16

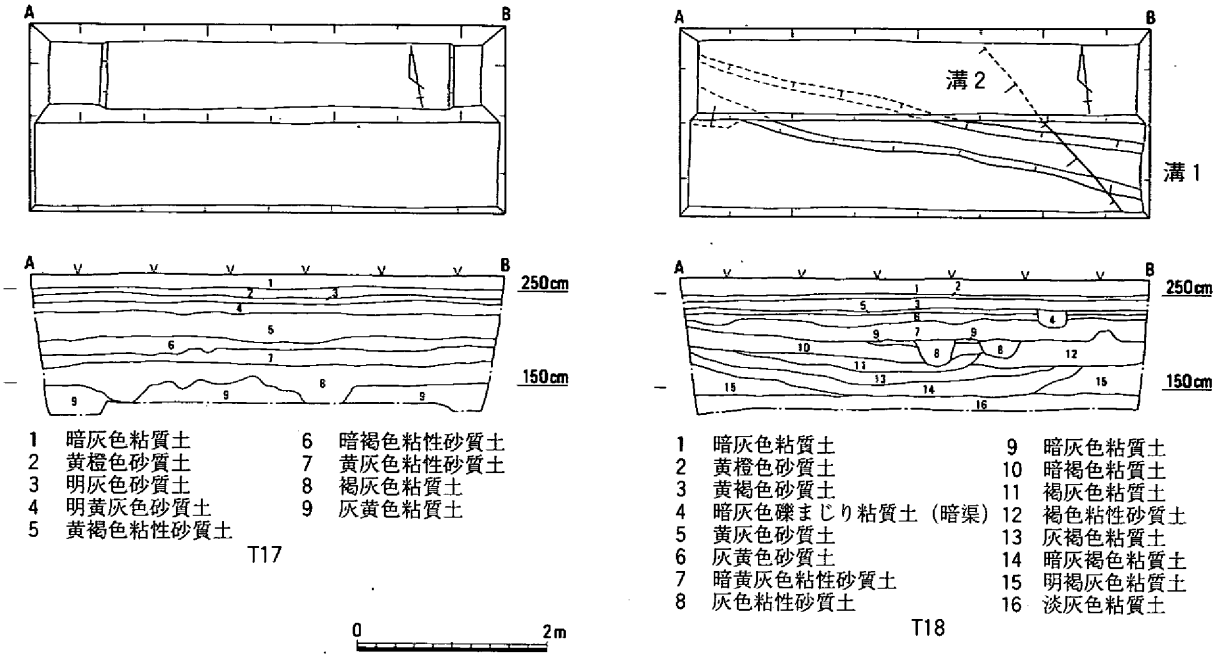
0　2m

第８図　Ｔ15・Ｔ16平・断面図（1／80）

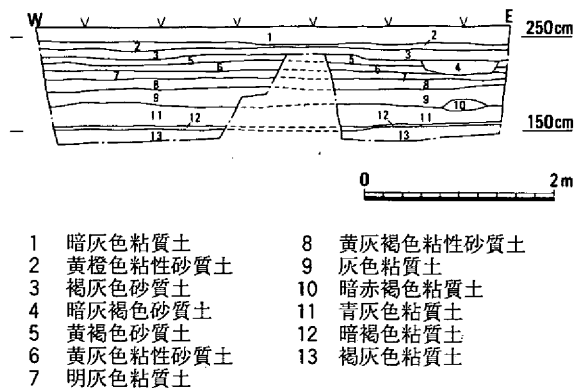
あったものと推測される。

Ｔ13およびＴ14（第６図３・４）はＴ12の東に位置するトレンチである。いずれのトレンチでも、深いところから、周辺のトレンチでみられたような暗褐色粘質土が検出され、かつては低湿地であったことがうかがわれる。Ｔ13では、トレンチ西半部の地表面から50cm付近で、落ち込みがみられたが、性格は不明である。出土遺物から中世ごろと思われる。また、Ｔ14では地表面から約80cm付近で、性格は不明であるが、浅い溝あるいは落ち込みがみられた。この付近を中心に、中世の土師質土器、須恵器、陶器が出土した。図示した土器（第７図）で、５は備前焼の甕の口縁部、６は土鍋である。また、図示しえなかったが、土師質椀、土鍋、砥石、馬歯が出土しており、いずれも中世の時期に属するものである。以上のことから、Ｔ13およびＴ14では、かつては低湿地であったものが、その後、堆積がすすみ、中世ごろからなんらかのかたちでの土地利用がすすんだものと推測される。

Ｔ15およびＴ16（第８図）は下笠加地区の東端に位置し、Ｔ９およびＴ10の南に位置する。いずれも表土から比較的浅いところで遺構が検出された。Ｔ15では表土下約30cmの浅いところから、土壙および柱穴が確認された。しかし、出土した遺物が僅少であることから、遺構のいとなまれた時期については不明である。一方、Ｔ16では溝および土壙が検出された。溝はトレンチを横切るか



第９図　Ｔ17・Ｔ18平・断面図（1／80）

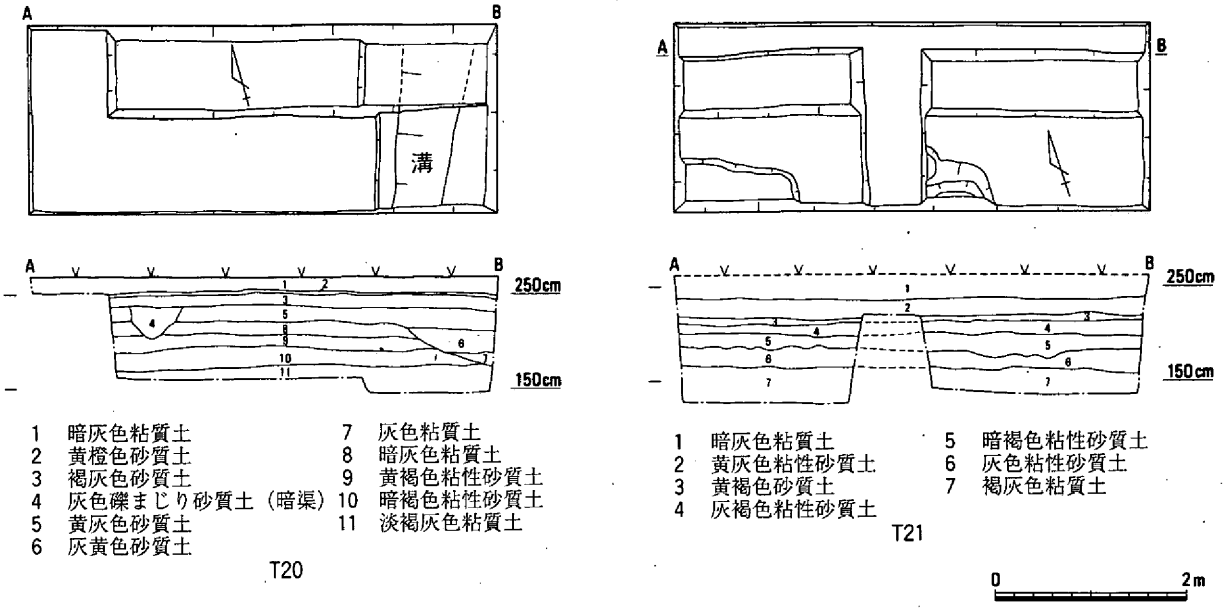


第10図　Ｔ19断面図（1／80）

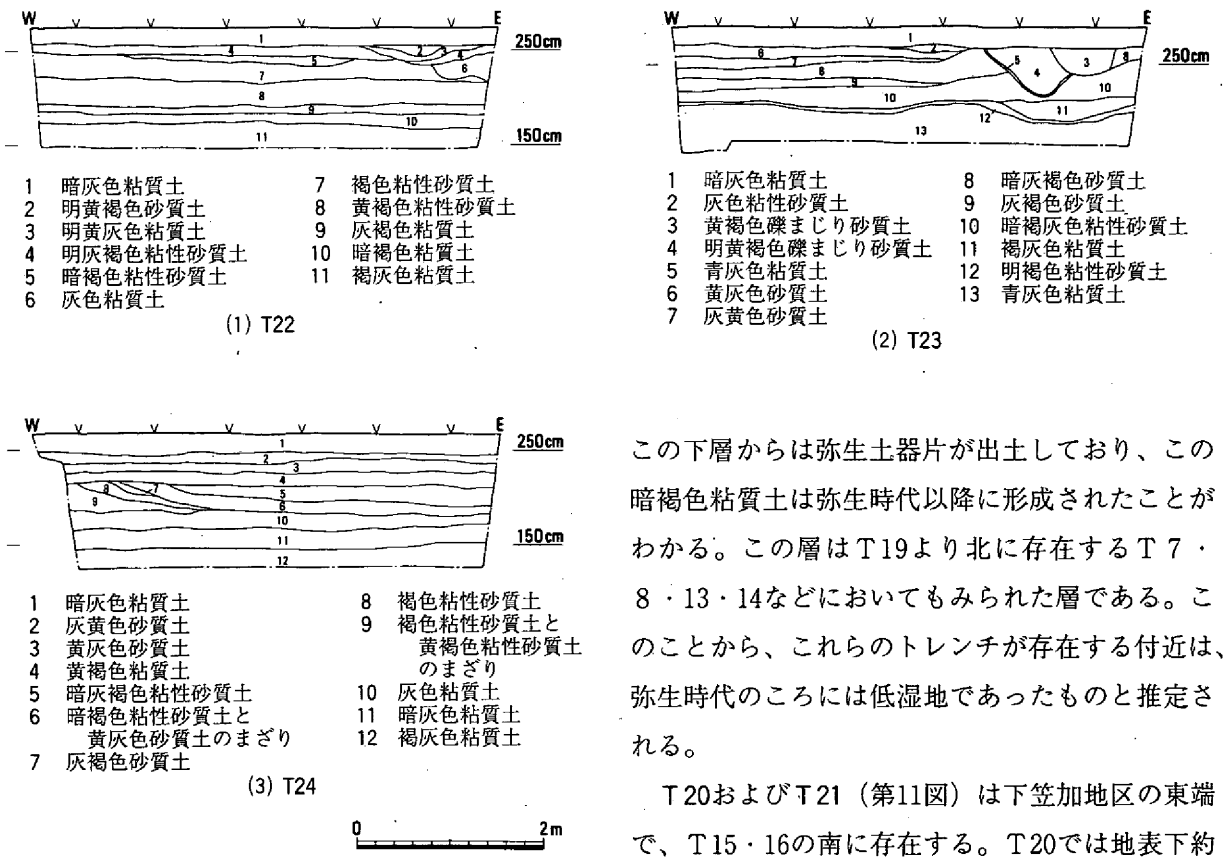
たちで、南北方向に存在する。溝は幅約170cm、深さ約70cmをはかる。溝内からは弥生土器片が10点程出土した。このことから、この溝は弥生時代に属するものと推定される。また、土壙については、出土遺物がなかったため、時期は不明であるが、埋土がＴ10でみられた土壙の埋土とよく似ていることから、弥生時代のものと推測される。また、トレンチ内から中世の須恵器等も出土している。このように、Ｔ15およびＴ16では比較的高いレベルで遺構面が形成されており、Ｔ９およびＴ10と同様に弥生時代から中世にかけて当該地付近には安定した微高地が存在していたものと考えられる。

Ｔ17およびＴ18（第９図）は我城山から南西にのびる尾根の先端から約100～150ｍ南に位置する。Ｔ18では表土下約50cm付近から溝２条等の遺構が確認できた。溝１は東西にはしる溝で幅約60～70cmをはかる。遺物は出土しなかったが、土層関係から溝２よりも新しい溝である。溝２はトレンチを斜めに横切る溝で、トレンチ内では溝の東岸を確認したのみである。溝２からは弥生土器片および土師器片が出土し、古墳時代初頭までには埋没したものと考えられる。また、トレンチ北壁の土層断面観察から、溝２の埋土を切り込んで土壙が２基検出された。さらに、土壙から東に約１ｍのところで、畦状の高まりがみられた。一方、Ｔ17からは遺構および遺物は検出されなかったが、Ｔ18などでみられた遺構の存在する微高地と同じと考えられる土層が確認できたため、Ｔ９・10・15・16などでみられた下笠加地区東部にひろがる微高地がこの付近にまでのびていたものと考えられる。

Ｔ19（第10図）はＴ18から約200ｍほど東に位置するトレンチである。トレンチ内からは明確な遺構は検出できなかったが、地表面から約１ｍの深いところで暗褐色を呈する粘質土（12層）を検出した。



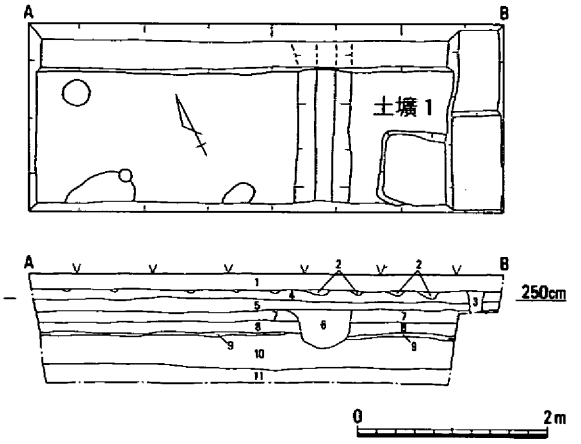
第11図　Ｔ20・Ｔ21平・断面図（1／80）



第12図　Ｔ22～Ｔ24断面図（1／80）

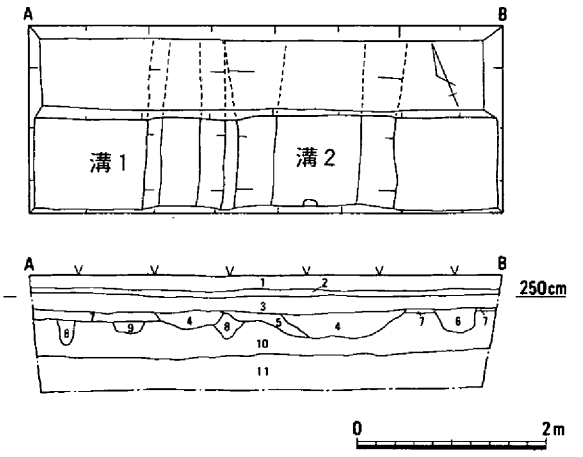
この下層からは弥生土器片が出土しており、この暗褐色粘質土は弥生時代以降に形成されたことがわかる。この層はＴ19より北に存在するＴ７・８・13・14などにおいてもみられた層である。このことから、これらのトレンチが存在する付近は、弥生時代のころには低湿地であったものと推定される。

Ｔ20およびＴ21（第11図）は下笠加地区の東端で、Ｔ15・16の南に存在する。Ｔ20では地表下約50cmの付近より、トレンチの東端を南北にはしる溝を検出した。溝は中世と考えられる層を切っていることから、中世以降にいとなまれた可能性が高い。溝の下層の埋土は非常に粘質のつよい土層で、この溝が用水路として機能していたことを示す。また、Ｔ21では、地表下60cm程のやや深いところから遺物包含層を検出し、弥生土器およびサヌカイト片が出土した。弥生土器は比較的多く出土した

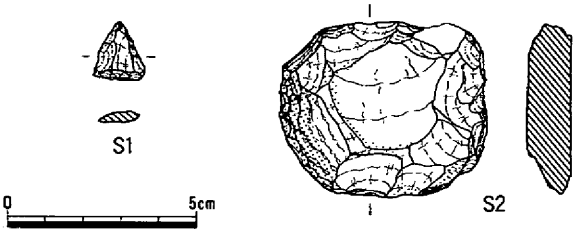


1　暗灰色粘質土
2　灰色粘性砂質土
3　暗赤褐色粘質土（暗渠）
4　黄灰色砂質土
5　灰黄色砂質土
6　褐灰色礫まじり砂質土
7　明黄褐色粘質土
8　暗褐色粘性砂質土
9　暗黄褐色粘性砂質土
10　暗灰褐色粘性砂質土
11　黄褐色粘質土

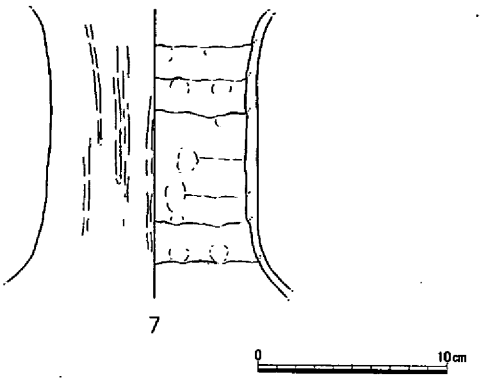
第13図　Ｔ25平・断面図（1／80）
および出土遺物（1／4）



1　暗灰色粘質土
2　黄灰色砂質土
3　灰色粘性砂質土
4　灰色礫まじり砂質土
5　灰色砂質土
6　灰褐色粘性砂質土
7　褐灰色粘性砂質土
8　暗褐色粘性砂質土
9　褐灰色粘性砂質土
10　暗黄褐色粘性砂質土
11　黄褐色粘性砂質土



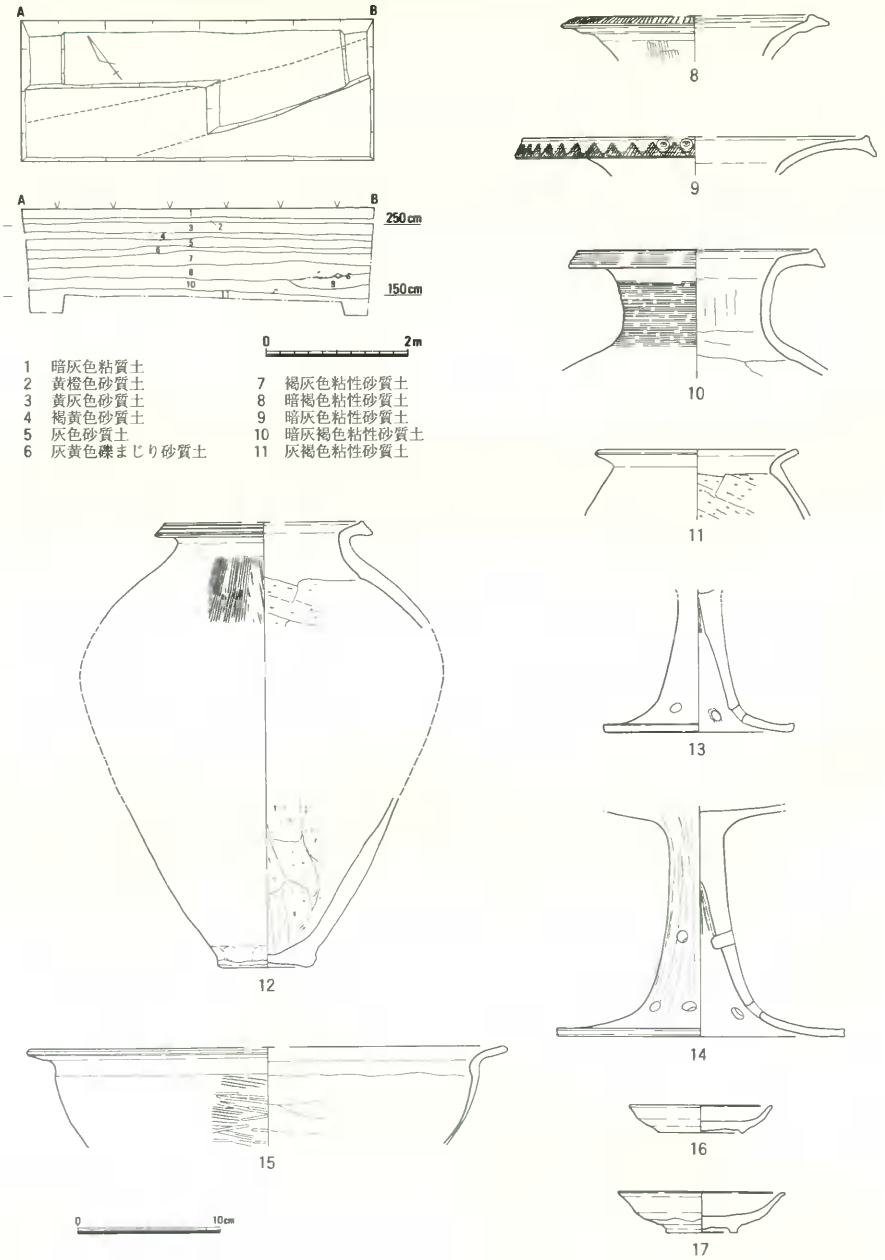
第14図　Ｔ26平・断面図（1／80）
および出土遺物（1／2）



ものの、すべて小片であり、図示できるものはなかったが、胎土の特徴などから、弥生時代中期から後期にかけての時期と考えられる。遺物包含層下からは灰色の層を切り込むかたちで、くぼみ状の遺構が検出されたが、人為的につくられたものかどうかは不明である。このように、Ｔ９・10・15・16で検出された微高地と同じ微高地がＴ20・Ｔ21でも確認されたが、遺構面はＴ20・Ｔ21のほうが低いことから、微高地は北から南にいたるにつれて下がっているものと考えられる。

Ｔ22～24（第12図）は下笠加地区のほぼ中央に位置するトレンチであるが、いずれのトレンチからも明確な遺構は検出されず、また、出土した遺物もごくわずかであった。Ｔ22（第12図１）およびＴ24（第12図３）ではトレンチの底付近で、褐灰色の粘質土が検出された。この土層はＴ11・12・13・14などでみられたものとよく似た粘質土であり、この付近がかつて低位部に相当していたものと考えられる。Ｔ23（第12図２）では、トレンチの底から青灰色で粘性のつよい層およびしまりのない砂礫層がみられ、この付近が旧河道に位置しているものと推測される。

Ｔ25（第13図）およびＴ26（第14図）はＴ24の東部に存在する。いずれの調査区においても遺構および遺物の存在が確認できた。Ｔ25では表土下約60cmのところから遺物包含層を確認し、弥生土器およびサヌカイト片が出土した。遺物包含層下からは土壙および柱穴が確認できた。土壙１は70

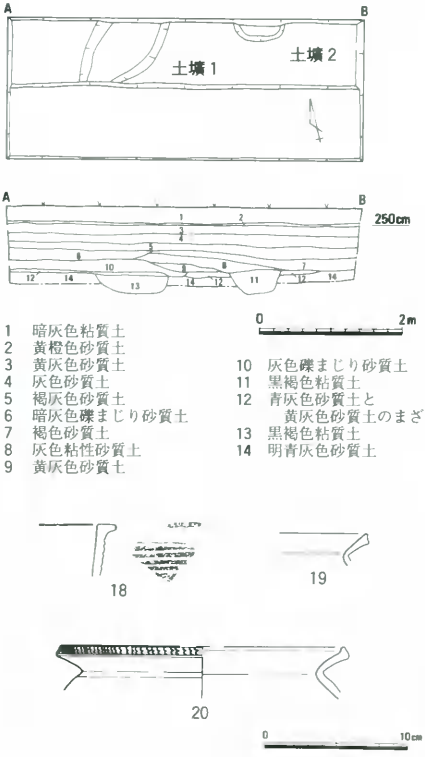


第15図　Ｔ27平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）

～80cm四方で、深さは10cmほどの浅い土壙であったが、弥生土器（７）が出土した。一方、Ｔ26からはトレンチを南北に横切る溝２条、土壙および柱穴を確認した。溝は出土遺物から中世以降のものと

考えられる。土壙および柱穴は出土遺物が少ないため、詳細なことは不明であるが、土壙については弥生時代を中心にいとなまれた可能性がある。出土遺物としては、弥生土器を中心にあげられるが、図示しえなかった。また、トレンチ内からサヌカイト製の石器（第14図）が出土している。S1は石鏃、S2は石核で表面が摩耗している。また、その他に青磁片等が出土した。

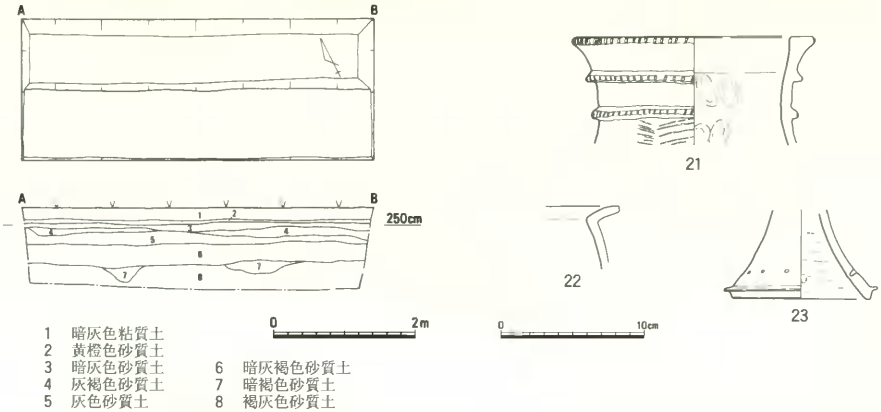
Ｔ27（第15図）はＴ26の南に位置するトレンチである。トレンチは斜めに水路等の掘削で破壊されていたが、トレンチ全体にわたり遺物包含層が検出された。包含層は地表下１ｍほどの深いところから検出され、約20～30cmの厚さがある。遺物包含層内からは弥生土器を中心とする土器片が多量に出土した。土器は特にトレンチ北壁の東半部に集中しており、土器溜りのような様相を呈していた。出土遺物は整理箱１箱程度出土した。図示した土器（第15図）のうち、８～15は弥生土器である。８～10は壺である。口縁端部に８は貝殻腹縁による文様が、９は円形浮文および鋸歯文が施されている。11・12は甕である。13・14は高杯の脚部であり、円孔が施されている。15は鉢である。これらの弥生土器はおおむね弥生時代後期を中心とする時期のものである。これらの遺物の出土した地点のレベルは175cm前後と周辺の微高地上面にくらべて低いことから、Ｔ27は微高地でも低湿地に近い周縁部に相当していたものと考えられる。また、トレンチ内から陶磁器片も出土している。そのうち、16は灰釉陶器、17は唐津焼である。



第16図　Ｔ28平・断面図（1／80）
および出土遺物（1／4）

Ｔ28（第16図）はＴ27の南に存在するトレンチである。Ｔ28ではトレンチの底から土壙が検出された。土壙の埋土はいずれも黒褐色を呈し、中から弥生土器が出土した。そのうち、図示しえた土器（第16図）のうち、18は土壙１より、19・20は土壙２より出土した。18は甕の口縁部である。20は口縁端部に貝殻の腹縁を利用した文様がつけられている。出土した遺物から土壙１は弥生時代前期末葉、土壙２は弥生時代中期に埋没したものであると推測される。これらの土壙から地表面までの土層は砂質土を中心とするもので、このことから、この付近は、かつては微高地の一部、あるいは周縁部であったのが、河川の氾濫等によって、河道になっていたものと考えられる。

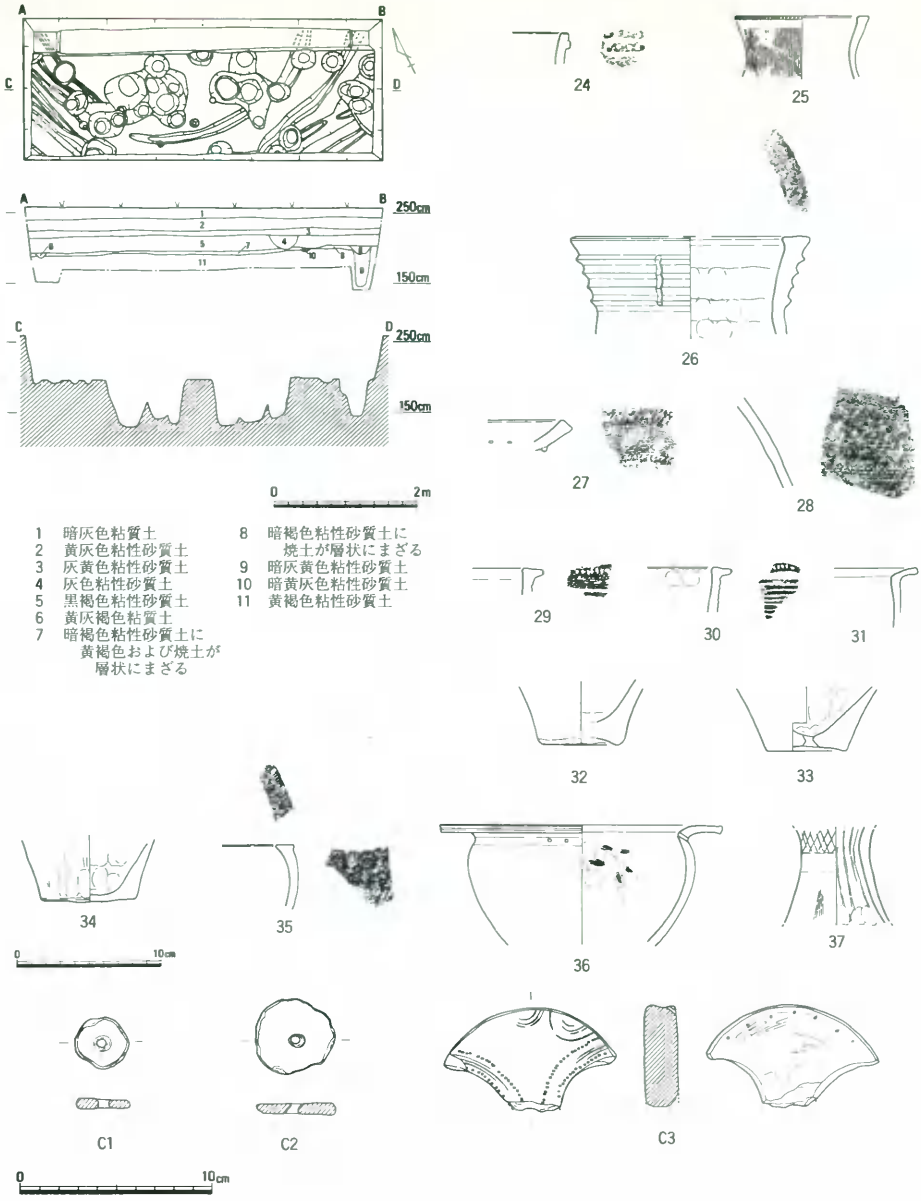
Ｔ29（第17図）はＴ28の東に位置する。土層断面観察から表土下約70cmで弥生土器を含む土壙（７層）が検出された。土壙はしまりのない砂質土上に形成されており、また、土壙から上の層も、粗砂を中心とする砂質土層であることから、この付近は微高地というよりも、旧河道に近い場所であり、幾度となく河川からの浸水があったものと考えられる。図示しえた土器（第17図）で、21は壺であり、口縁端部および突帯部に刻目がほどこ



第17図　Ｔ29平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）

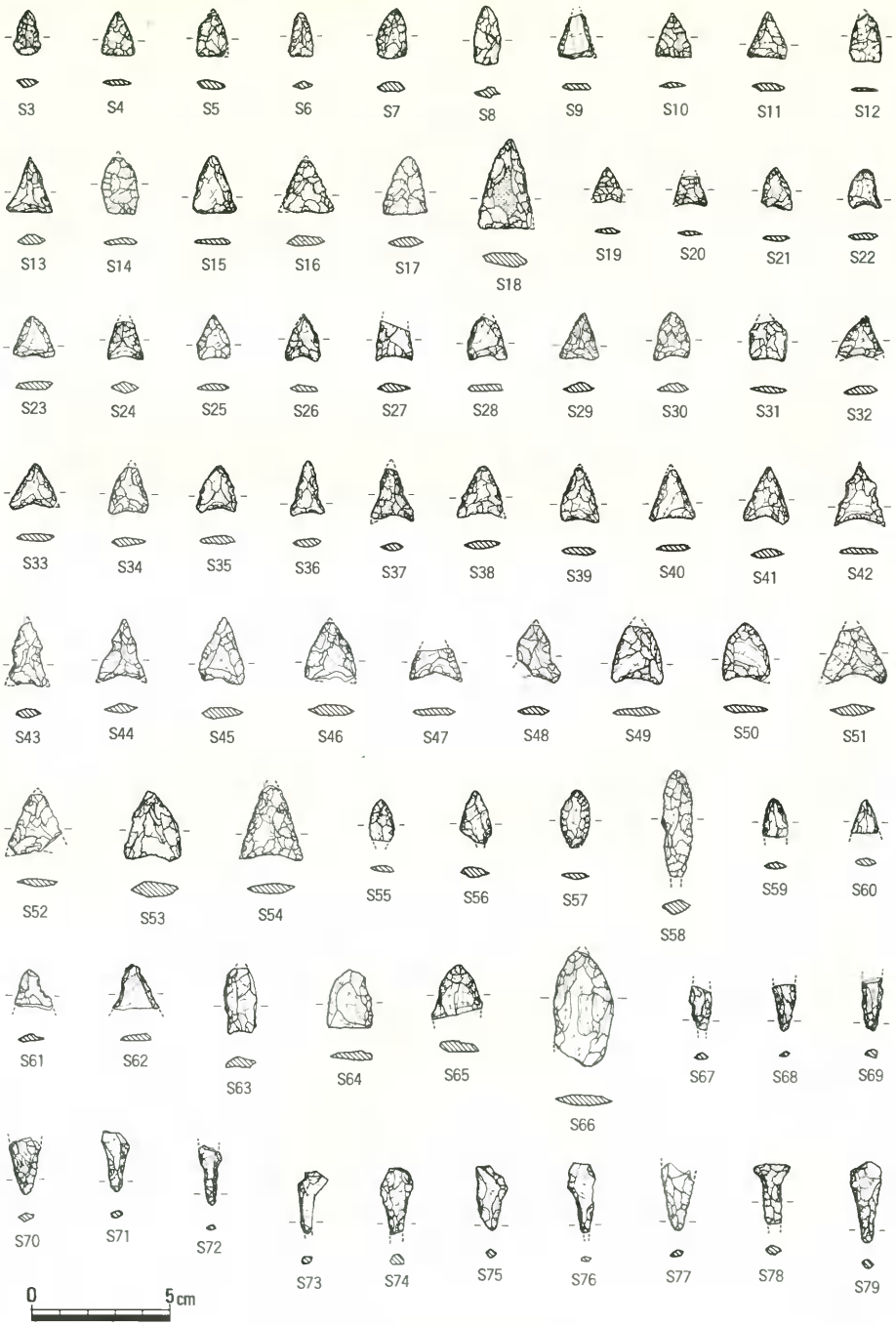
されている。22は甕である。23は台部である。これらの土器は弥生時代中期に属するものである。

Ｔ30（第18図）は下笠加地区の東端に位置する。Ｔ30では表土下約60cmで、土器片およびサヌカイト片を多く含む黒褐色土層（５層）を検出した。トレンチ北壁の土層観察から、この黒褐色土層下に住居の床面とみられる層（７・８層）が確認できたことから、竪穴住居跡と判断した。床面には、赤く焼けた土や暗褐色土および黄褐色土が薄く層状に堆積しており、多いところで７～８層に細分が可能であった。トレンチ内からは、この床面下、あるいは床面を切り込むかたちで、多くの柱穴や土壙を検出した。特に、壁体溝とみられる溝が同心円状に幾重にもみられ、少なくとも５回は建て直しがおこなわれたものと考えられる。また、柱穴はトレンチ全体にわたり検出されたが、特にトレンチの中央の中程の２箇所に集中している。柱穴は径30cmほどのものが多く、深さは床面から50～70cmほどあった。柱穴の中には径20cm前後の柱の痕跡が認められるものもあった。トレンチ内からは弥生土器やサヌカイト片など多くの遺物が出土し、その量は整理箱２箱におよんだ。しかしながら、土器は小片が多く、図示しえた土器（第18図）はわずかである。24は縄文時代晩期の土器である。口縁端部および突帯に刻目がほどこされている。25～28は壺である。25は口縁端部に刻目がついている。26は口縁端面に櫛描波状文が、また、頸部の突帯上に棒状浮文がみられる。27は口縁端部および突帯に刻目が、口縁部には櫛描波状文が、また、頸部に小孔がみられる。28は壺の胴部である。上から、櫛描波状文、櫛描平行文、刺突文がほどこされている。29～31は甕である。32～34は底部である。33は穿孔がみられる。35～37は高杯である。35は内傾する口縁端面に綾杉文が、杯部に刺突文がほどこされている。36は高杯杯部であり、頸部に小孔がある。37は脚柱部で、斜格子文がみられる。C1およびC2は土器を転用した紡錘車である。C3は分銅形土製品である。外縁部に、計７個の貫孔がみられる。またくびれ部には櫛描文がほどこされ、その両側に刺突文がみられる。また、その他の遺物として、焼けた粘土塊も出土している。また、住居内の埋土には多くのサヌカイト片が含まれていたことから、埋土をふるいにかけて、水洗した。その結果、チップおよびフレイクを含めたサヌカイトの総重量は製品とあわせて約2,250ｇにおよんだ。第19・20図にしめしたS3～S104は、いずれもサヌカイト製品であり、住居埋土、床面、柱穴より出土した。S3～S58は石鏃である。石鏃は平基式、凹基式がほとん

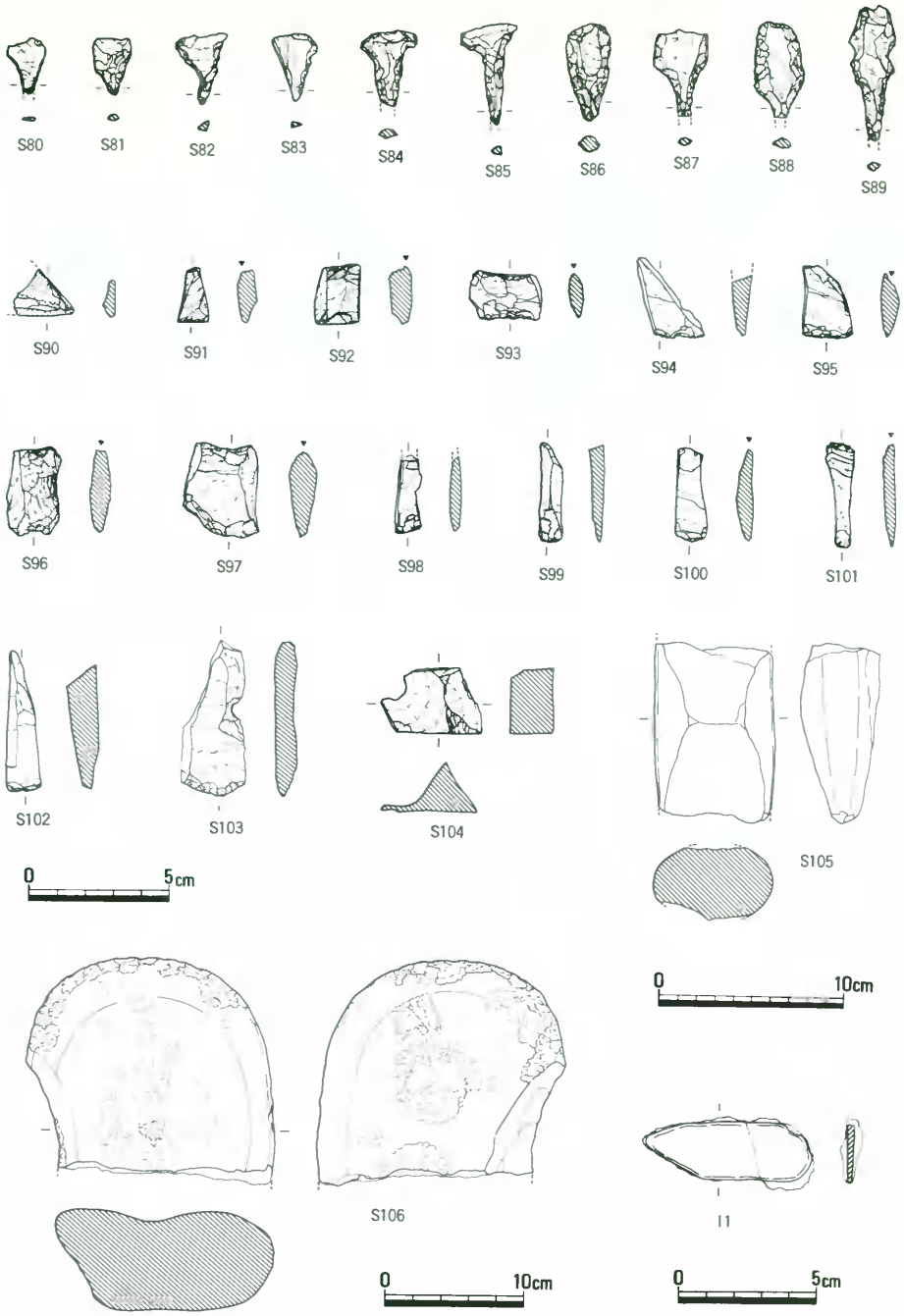


第18図　T30平・断面図（1／80）および出土遺物（1／3・1／4）

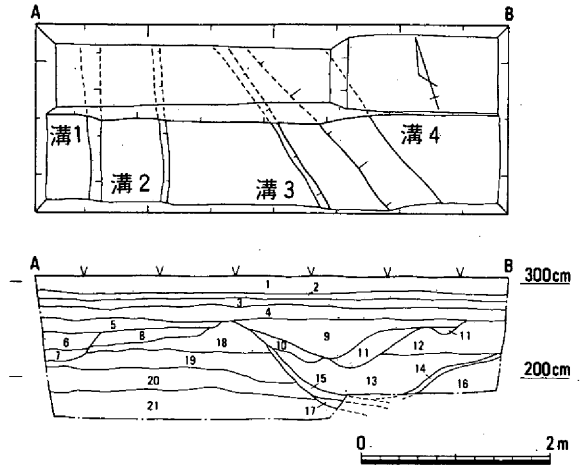
どで凸基式のものはわずかである。S59～S62は石鏃の先端部の破片である。S63・S64は石鏃の未製品と思われる。S65・S66は大形の石鏃あるいは石槍の可能性がある。S67～S89は石錐である。S90は擦り切りの痕がみられる。S91～S102は楔形石器である。S103は抉りがみられ、スクレイパーの可能性



第19図　Ｔ30出土石器（1／2）

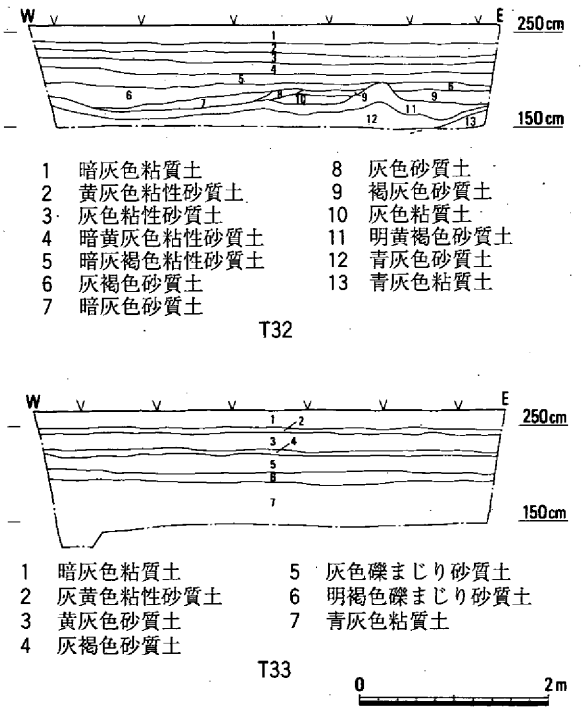


第20図　Ｔ30出土石器（1／2・1／3・1／4）・鉄器（1／2）



1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　淡黄灰色砂質土
4　黄灰色砂質土
5　黄灰褐色砂質土
6　褐灰色粘性砂質土
7　灰黄色粘質土
8　暗灰褐色粘性砂質土
9　淡灰黄色粘性砂質土
10　暗灰色砂質土
11　暗灰色粘性砂質土
12　明褐黄色粘性砂質土
13　黄褐色粘性砂質土
14　灰色砂質土
15　灰褐色粘性砂質土に灰色粘質土がまじる
16　明黄褐色粘性砂質土
17　青灰色粘質土
18　暗褐色粘性砂質土
19　灰褐色粘性砂質土
20　暗赤褐色粘性砂質土
21　暗黄褐色粘性砂質土

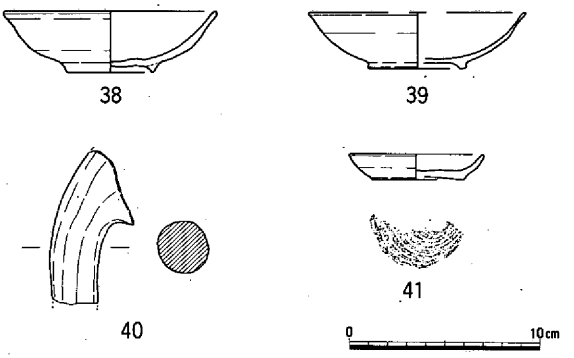
第21図　Ｔ31平・断面図（1／80）
および出土遺物（1／4）



1　暗灰色粘質土
2　黄灰色粘性砂質土
3　灰色粘性砂質土
4　暗黄灰色粘性砂質土
5　暗灰褐色粘性砂質土
6　灰褐色砂質土
7　暗灰色砂質土
8　灰色砂質土
9　褐灰色砂質土
10　灰色粘質土
11　明黄褐色砂質土
12　青灰色砂質土
13　青灰色粘質土

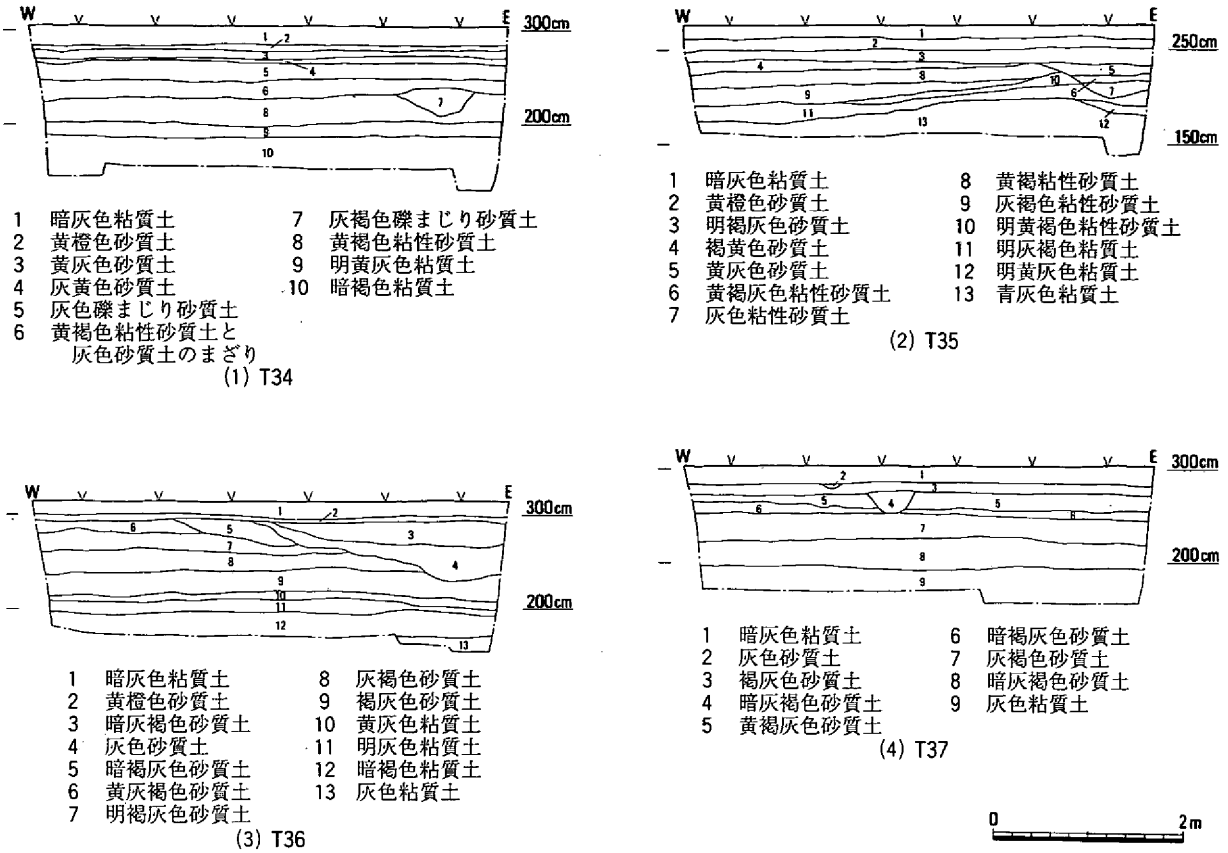
1　暗灰色粘質土
2　灰黄色粘性砂質土
3　黄灰色砂質土
4　灰褐色砂質土
5　灰色礫まじり砂質土
6　明褐色礫まじり砂質土
7　青灰色粘質土

第22図　Ｔ32・33断面図（1／80）



が考えられる。S104はサヌカイト石材である。S105は太型蛤刃石斧の破損品であり、S106は凹石である。石斧および凹石はいずれも破損した状態で柱穴内に破棄された状態でみつかった。I1は鉄器である。薄い板状のものであり、刃はない。重さは16.0ｇをはかる。このように、Ｔ30からは弥生土器片および石器等が出土したが、特に、サヌカイト片は製品および剥片をふくめ、多量に出土したことから、この住居跡で石器が製作されていたことがわかる。なお、この住居跡は、弥生時代中期前半に比定できる。

Ｔ31（第21図）は下笠加地区の西端部に位置する。トレンチ内を南北にはしる溝２条（溝１・２）、斜めに流れる溝２条（溝３・４）を検出した。溝１・２・３はトレンチの西半部に位置する溝で、中世を中心とする遺物が出土した。第21図の38・39・41は溝２より出土したものである。38・39はともに土師質椀である。41は土師質皿である。これらの遺物から、溝２は13世紀後半ごろにいとなまれていたと考えられ、溝１・３はそれ以後の遺構と考えられる。溝４はトレンチ東半部に位置する深さ90cm以上をはかる溝である。これらの溝が掘り込まれている土層（8層）から、弥生土器および土師器と思われる土器片がみられ、また、土層も下笠加地区東部でみられた微高地のものとよく似ていることから、このトレンチ付近は、古くは弥生時代および古墳時代に形成された微高地であったと考えられ、中世を中心に土地利用が進んだものと推測できる。この微高地は現在の地形などを考慮にいれて推測するならば、現在の四軒屋を中心とする微高地の一部であった可能性がたかく、



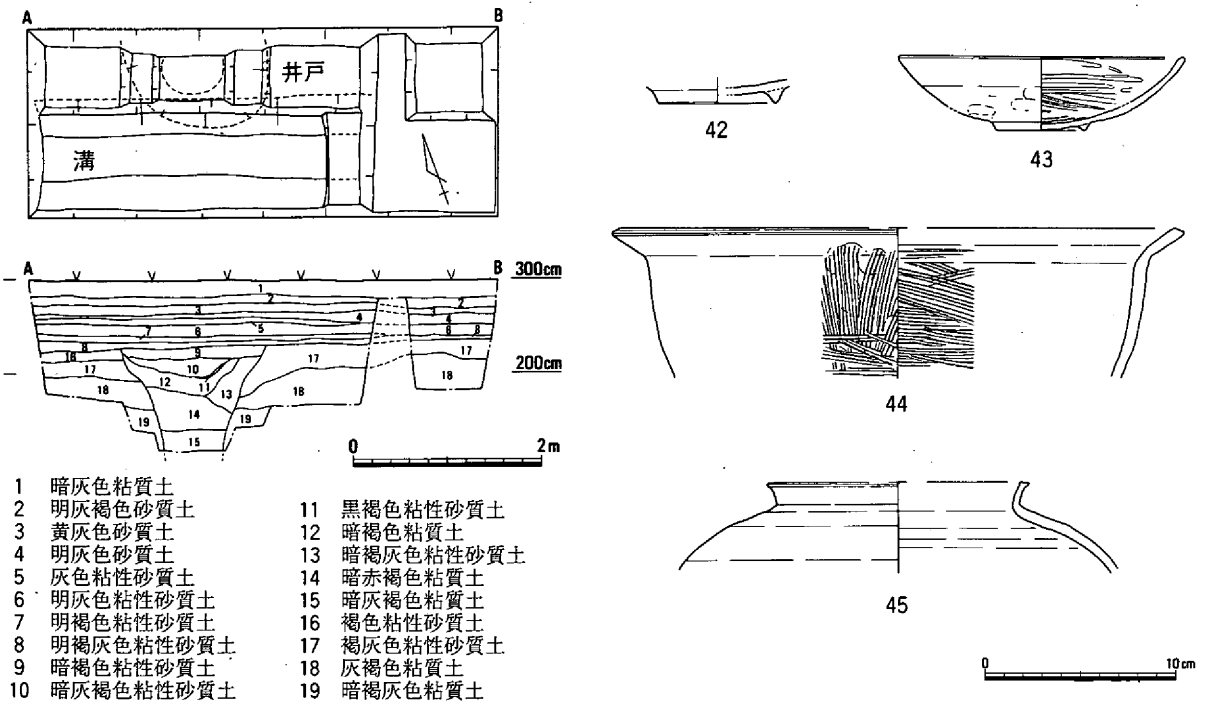
第23図　Ｔ34～Ｔ37断面図（1／80）

下笠加地区の東部で認知した微高地とは別のものであると考えられる。

Ｔ32およびＴ33（第22図）は下笠加地区の中央よりやや南に位置するトレンチである。トレンチの底からは青灰色を呈する粘質土が検出され、またその上に堆積している層は締まりのない砂層であった。このことから、このトレンチ付近はいずれも河川の流路にあたっていたものと推定できる。なお、遺物は数片の弥生土器、須恵器が出土したのみである。

Ｔ34～37（第23図）はいずれも下笠加地区の南部に位置するトレンチである。いずれのトレンチ内からも遺構は検出できなかった。また、出土遺物もわずかであった。Ｔ34およびＴ36(第23図１・３）では、トレンチの下半部で暗褐色粘質土を検出した。この層は下笠加地区北半部のトレンチ（Ｔ７・８・13・14・19など）でみられたものとよく似た層であることから、Ｔ34およびＴ36もかつては微高地の周辺に存在した低湿地であったものと推測される。Ｔ35（第23図２）ではトレンチの下半部からＴ32およびＴ33でみられたような青灰色を呈する粘質土および締まりのない砂層がみられた。このことから、Ｔ35は旧河道であったものと推定され、Ｔ１～Ｔ４で確認された旧河道はＴ23・32をとおり、下笠加地区の南西端に位置するこのＴ35付近を抜けて南西方向に流れていたものと考えられる。Ｔ37（第23図４）はいずれの土層も水平堆積で、人為的な痕跡はみられなかった。

Ｔ38（第24図）は今回の調査区域の中での最南端に位置するトレンチである。表土下約60cmのところで井戸１基、溝１条を検出した。井戸は検出面で径約150cmをはかる、素掘りの井戸である。調査範囲が限られていることから、井戸の底まで調査することができず、深さは不明である。井戸からは土師質土器、須恵器、瓦器など多くの土器が出土した。出土遺物は、特に井戸の上層に近い13層を中

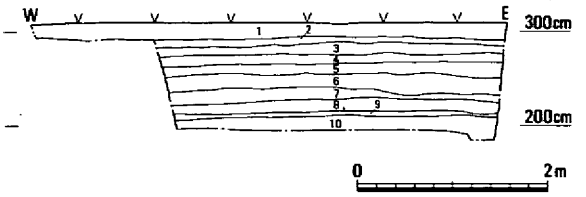


第24図　Ｔ38平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）

心に出土した。出土した土器はいずれも破片であった。図示できた土器（第24図）のうち、42は土師質椀である。43は瓦器で和泉型である。44は土鍋である。45は壺である。また、須恵質椀、魚住焼の甕等の破片も出土している。これらの遺物から、井戸は13世紀を中心とした時期に廃棄されたものと推測される。また、トレンチの南半で東西にはしる溝を検出した。溝は、幅等の大きさは不明であるが、深さは約50cmをはかる。溝には締まりのない砂質土が多く堆積していた。出土遺物は少なく、溝の時期は不明であるが、溝は井戸の埋土を一部で切っていることから、井戸より新しいことがわかった。また、この井戸や溝が掘り込まれている土層（16・17層）からは、弥生土器片および土師器片が少量であるが出土しており、これらの遺構がいとなまれた微高地は古くは弥生時代から形成されていったものと考えられる。このＴ38で確認された微高地は、周辺の地形を考慮するならば、これよりさらに南に位置すると考えられる微高地の一部である可能性がたかい。また、次に述べるＴ39は旧河道であったと考えられるため、Ｔ38の存在する微高地は下笠加地区東部で検出された微高地とは別のものである可能性もあわせて指摘できる。

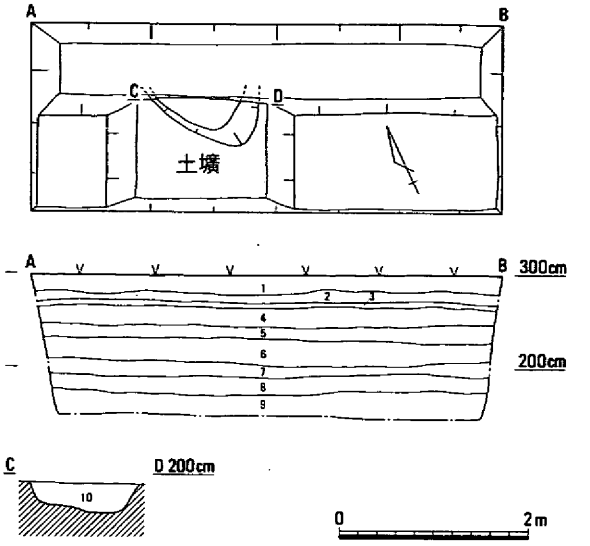
Ｔ39（第25図）はＴ38の東に位置するトレンチである。トレンチの底からはＴ32・33・35でみられたような青灰色を呈する粘質土が堆積しており、また、その上面に堆積している層は締まりのない礫混じりの砂層を中心とする層であった。このことから、Ｔ39付近は旧河道に相当していたものと思われ、Ｔ１～Ｔ４で確認された旧河道は一方ではＴ32およびＴ35をとおり南西方向に流れ、一方では、Ｔ33をとおり、このＴ39付近を抜け、南に流れていたものと推測できる。

Ｔ40（第26図）は下笠加地区の南東端に位置するトレンチである。トレンチの北壁断面はいずれも水平堆積で、人為的な痕跡はみられなかったが、トレンチの中程から土壙を確認した。土壙は地表面から約１ｍほどの深いところから検出され、埋土からは弥生土器片が出土した。土器はいずれも細片のため、図示しえなかったが、土器の胎土には粗砂が多く含まれていることから、弥生時代前期から



1　暗灰色粘質土
2　黄橙色砂質土
3　灰色砂質土と
　　褐色砂質土のまざり
4　灰褐色礫まじり砂質土
5　褐灰色礫まじり砂質土
6　灰褐色砂質土
7　褐色砂質土
8　灰色砂質土
9　明褐色粘質土
10　青灰色粘質土

第25図　T39断面図（1／80）



1　暗灰色粘質土
2　黄灰色砂質土
3　黄橙色砂質土
4　褐灰色砂質土
5　淡灰褐色砂質土
6　灰褐色砂質土
7　灰色粘質土
8　明黄灰色粘質土
9　褐色粘質土
10　暗灰褐色粘性砂質土

第26図　T40平・断面図（1／80）

中期にかけての土器であると判断し、土壙もその時期にいとなまれたものと考えられる。土壙の上面に堆積している層はいずれも締まりのない砂層であり、T28と同様に、T40付近はかつては微高地の周辺部であったのが、ある時期に河川の流路の影響をうけ、この付近も大きく削られたものと推測できる。

調査区	遺構の有無	遺構面の深さ(cm)	遺構面までの深さ(cm)	遺物の出土量
T1	×			△
T2	×			△
T3	×			△
T4	×			△
T5	×			△
T6	×			△
T7	×			△
T8	×			△
T9	○	244	44	○
T10	○	260	24	○
T11	×			△
T12	×			△
T13	×			△
T14	○	193	77	○
T15	○	246	29	△
T16	○	238	36	○
T17	×	199	66	×
T18	○	207	62	△
T19	×			△
T20	○	218	49	△

調査区	遺構の有無	遺構面の深さ(cm)	遺構面までの深さ(cm)	遺物の出土量
T21	○	180	81	○
T22	×			△
T23	×			△
T24	×			×
T25	○	212	61	○
T26	○	237	36	○
T27	○	176	97	◎
T28	○	187	86	○
T29	○	200	75	△
T30	○	199	61	◎
T31	○	260	46	○
T32	×			△
T33	×			△
T34	×			△
T35	×			△
T36	×			△
T37	×			△
T38	○	230	68	○
T39	×			△
T40	○	192	107	△

注）遺物の出土量は、◎を整理箱１箱以上、○を整理箱半分程度、△をビニール袋１袋程度をめやすとし、×は遺物が出土しなかったことをしめす。

表１　トレンチ調査概要一覧表

第4章　ま　と　め

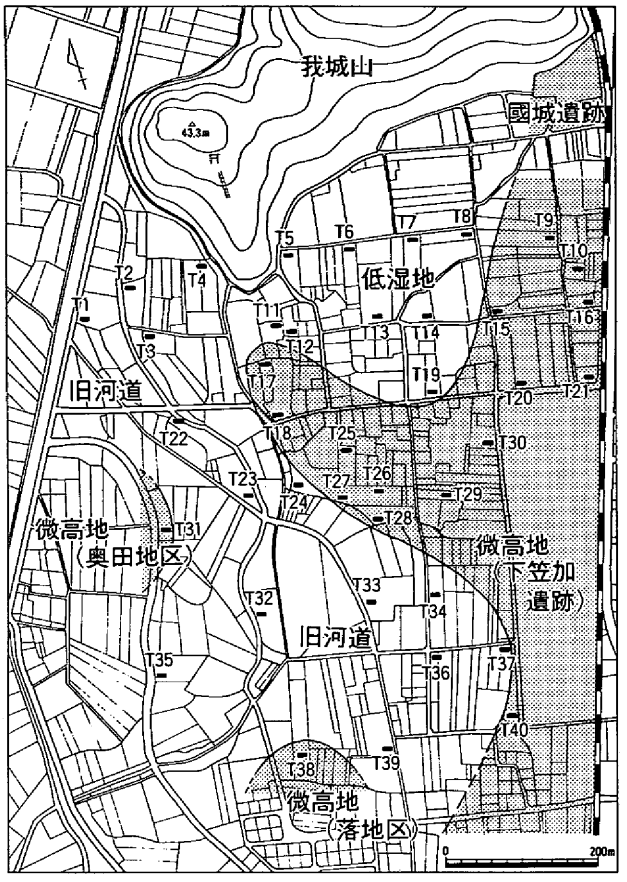
調査地点は、千町平野の北部に位置し、吉井川の支流である千田川東岸の邑久町下笠加に存在する。調査地は、『岡山県遺跡地図』（岡山県教育委員会　1974年）によると、熊山田散布地内に位置し、当該地周辺には、過去におこなわれた数回の調査から、下笠加遺跡など弥生時代を中心とする集落跡の存在がしられていた。そのため、今回の県営圃場整備事業で影響をうける区域内に計40箇所のトレンチを設定し、確認調査をおこなった。

調査の結果、調査範囲の東部、西部、南部で弥生時代から中世の遺構の存在する微高地を確認した。

東部の微高地では、弥生時代から中世の遺構が検出された。T10では、弥生時代中期の土壙および中世の柱穴がみられた。土壙からは、弥生土器やサヌカイトの剥片が出土し、柱穴内からは土師質土器、須恵器が出土した。また、T10の南に存在するT16では、同じく弥生時代の溝および土壙が検出された。これらの遺構が形成された微高地はT９・15・20・21でも確認でき、これは、さらに北に位置する上笠加國城遺跡でみられた微高地と一連のものである可能性が高い。また、トレンチからは古代および中世の遺物も検出されていること、さらには、この付近の小字で堀内、カジヤといった地名も残されていることから、この付近に集落が存在していた可能性が高い。この微高地は、さらに南にのびていることがT30およびT40などの調査で明らかになった。特に、T30では、弥生時代中期の竪穴住居跡が確認できた。竪穴住居は幾度の建て直しがあったものと推測され、住居内には多数の柱穴および土壙が存在した。住居内の土壙・柱穴および埋土からは弥生土器や石鏃などの石器が多数出土した。特に、サヌカイトの剥片が数多く検出されたことから、この住居跡で石器が製作されていた可能性がたかい。また、T40では、トレンチ内の深いところで弥生時代の土壙が検出された。土壙上面に堆積している土は粗砂を中心とするもので、この付近が微高地の周縁部に位置し、かつ、幾度も河川による浸食をうけていたことが想定できる。一方、この微高地は舌状に我城山から南西にのびる尾根の先端に向けてのびていることが、T17・18・25・26・27・28・29の調査で確認できた。いずれのトレンチからも弥生時代を中心とした遺構が検出された。T18では弥生時代から古墳時代初頭にかけての溝が、T25・26・28・29では弥生時代を中心とする土壙が、また、T27では遺物包含層が確認された。この微高地は、『全国遺跡地図　岡山県』（文化庁　1985年）で周知されている下笠加遺跡を含んでいることから、今回、新たに発見された微高地も含めて、下笠加遺跡と呼称する。

次に、T31の調査成果から、下笠加地区西部にも微高地の存在が確認された。T31では、微高地上に中世を中心とする時代の溝が数条確認できた。溝の中からは、中世の土師質土器などが出土した。この微高地は先に述べた東部の微高地とは別のものである可能性が高く、付近の地形から、T31より西に存在する四軒屋という集落を中心とする微高地の一部である可能性が考えられる。そのため、先述した下笠加遺跡と区別して扱う必要があるかもしれない。しかしながら、T31は現在の地籍では下笠加に属していることから、ここでは、この微高地をT31が存在する地区の小字をとって下笠加遺跡奥田地区と仮称しておく。

また、下笠加地区の南端に存在するT38では井戸および溝が検出され、この付近にも微高地が存在していたことがわかった。検出した井戸は素堀りの井戸で、中世の土師質土器や瓦器および須恵器が



第27図　遺跡推定範囲図（1／10,000）

多数出土した。このことから、この付近に中世の集落がいとなまれていたことが確認できた。この中世の集落の存在した微高地は、付近のトレンチの調査結果および周辺の地形から判断するならば、下笠加地区のさらに南に存在する微高地の一部である可能性がたかく、下笠加地区東部に位置する微高地とは別のものであると考えられる。そこで、東部の微高地と区別して扱うという意味で、この微高地をＴ38の小字をとって下笠加遺跡落地区と仮称することにする。

一方、これらの微高地以外の地区は、かつては低湿地あるいは河道の一部であった可能性がたかい。下笠加地区北部のＴ５～８、Ｔ11～14、Ｔ19では、大部分のトレンチで、調査区の深いところから、暗褐色を呈する粘質土が検出され、この付近に低湿地（後背低湿地）が存在していたことがわかった。この土層はＴ19の調査で、弥生時代以降に形成されたものと考えられ、下笠加地区東部に微高地が存在し、人々の生活がいとなまれていたころは、この付近はまだ低湿地であり、人が住めるような環境ではなかったことが推測される。この低湿地は中世ごろになると一部の地区から土地利用が開始され、現在にいたっているものと思われる。また、下笠加地区北西部で検出された旧河道は、東部と西部に存在する微高地の間を流れ、南部の微高地付近で二手にわかれ、一方は南西方向に、もう一方は南方向に流れていたものと推定できる。特に、南西方向に流れていたと考えられる旧河道の痕跡は、現在の畦畔に反映されており、さらに下流域で干田川あるいは吉井川に合流していたものと思われる。

以上の調査成果から、この下笠加地区には、弥生時代および中世を中心とした集落跡の存在する微高地が東部、西部、南部に存在していることが確認できた。そして東部にひろがる微高地を下笠加遺跡とし、さらに西部、南部にひろがる微高地をそれぞれ下笠加遺跡奥田地区、下笠加遺跡落地区と仮称することとした。

遺物番号	調査区	器種	重さ(g)	石材	備考
S 1	T26	石鏃	0.7	サヌカイト	
S 2	T26	石核	44.4	サヌカイト	
S 3	T30	石鏃	0.5	サヌカイト	
S 4	T30	石鏃	0.4	サヌカイト	
S 5	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S 6	T30	石鏃	0.4	サヌカイト	
S 7	T30	石鏃	0.8	サヌカイト	
S 8	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	
S 9	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	一部欠損
S10	T30	石鏃	0.4	サヌカイト	
S11	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	
S12	T30	石鏃	0.4	サヌカイト	一部欠損
S13	T30	石鏃	0.9	サヌカイト	一部欠損
S14	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	一部欠損
S15	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	
S16	T30	石鏃	1.1	サヌカイト	一部欠損
S17	T30	石鏃	1.1	サヌカイト	
S18	T30	石鏃	3	サヌカイト	一部欠損
S19	T30	石鏃	0.1	サヌカイト	一部欠損
S20	T30	石鏃	0.3	サヌカイト	一部欠損
S21	T30	石鏃	0.3	サヌカイト	
S22	T30	石鏃	0.4	サヌカイト	
S23	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	
S24	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S25	T30	石鏃	0.5	サヌカイト	
S26	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S27	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S28	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	一部欠損
S29	T30	石鏃	0.5	サヌカイト	
S30	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	
S31	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S32	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S33	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S34	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	一部欠損
S35	T30	石鏃	0.8	サヌカイト	
S36	T30	石鏃	0.5	サヌカイト	
S37	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	一部欠損
S38	T30	石鏃	0.8	サヌカイト	一部欠損
S39	T30	石鏃	0.8	サヌカイト	一部欠損
S40	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S41	T30	石鏃	0.8	サヌカイト	
S42	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	
S43	T30	石鏃	0.9	サヌカイト	一部欠損
S44	T30	石鏃	0.8	サヌカイト	一部欠損
S45	T30	石鏃	1.4	サヌカイト	
S46	T30	石鏃	1.6	サヌカイト	一部欠損
S47	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S48	T30	石鏃	0.8	サヌカイト	一部欠損
S49	T30	石鏃	1.1	サヌカイト	一部欠損
S50	T30	石鏃	1.1	サヌカイト	一部欠損
S51	T30	石鏃	1.5	サヌカイト	一部欠損
S52	T30	石鏃	1.1	サヌカイト	一部欠損
S53	T30	石鏃	2.4	サヌカイト	一部欠損
S54	T30	石鏃	1.9	サヌカイト	一部欠損
S55	T30	石鏃	0.3	サヌカイト	一部欠損
S56	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	一部欠損
S57	T30	石鏃	0.6	サヌカイト	一部欠損
S58	T30	石鏃	2.1	サヌカイト	一部欠損
S59	T30	石鏃	0.4	サヌカイト	一部欠損
S60	T30	石鏃	0.3	サヌカイト	一部欠損
S61	T30	石鏃	0.4	サヌカイト	一部欠損
S62	T30	石鏃	0.7	サヌカイト	一部欠損
S63	T30	石鏃未製品？	1.4	サヌカイト	一部欠損
S64	T30	石鏃未製品？	1.3	サヌカイト	
S65	T30	石鏃？石槍？	1.4	サヌカイト	一部欠損
S66	T30	石鏃？石槍？	3.9	サヌカイト	一部欠損
S67	T30	石錐	0.4	サヌカイト	一部欠損
S68	T30	石錐	0.5	サヌカイト	一部欠損
S69	T30	石錐	0.6	サヌカイト	一部欠損
S70	T30	石錐	1.1	サヌカイト	一部欠損
S71	T30	石錐	0.7	サヌカイト	
S72	T30	石錐	0.5	サヌカイト	一部欠損
S73	T30	石錐	0.8	サヌカイト	一部欠損
S74	T30	石錐	1.1	サヌカイト	一部欠損
S75	T30	石錐	1.1	サヌカイト	
S76	T30	石錐	0.6	サヌカイト	一部欠損
S77	T30	石錐	0.9	サヌカイト	一部欠損
S78	T30	石錐	0.8	サヌカイト	一部欠損
S79	T30	石錐	1.4	サヌカイト	
S80	T30	石錐	0.5	サヌカイト	一部欠損
S81	T30	石錐	0.9	サヌカイト	
S82	T30	石錐	1.7	サヌカイト	
S83	T30	石錐	1.1	サヌカイト	
S84	T30	石錐	2.1	サヌカイト	一部欠損
S85	T30	石錐	1.5	サヌカイト	一部欠損
S86	T30	石錐	3.8	サヌカイト	
S87	T30	石錐	2.6	サヌカイト	
S88	T30	石錐	3.4	サヌカイト	一部欠損
S89	T30	石錐	3.9	サヌカイト	一部欠損
S90	T30	擦り切り工具	1.5	サヌカイト	一部欠損
S91	T30	楔形石器	1.8	サヌカイト	
S92	T30	楔形石器	4.4	サヌカイト	
S93	T30	楔形石器	2.7	サヌカイト	
S94	T30	楔形石器	3.2	サヌカイト	一部欠損
S95	T30	楔形石器	3.6	サヌカイト	
S96	T30	楔形石器	5	サヌカイト	
S97	T30	楔形石器	10.9	サヌカイト	
S98	T30	楔形石器	1.5	サヌカイト	一部欠損
S99	T30	楔形石器	1.9	サヌカイト	
S100	T30	楔形石器	2.8	サヌカイト	
S101	T30	楔形石器	1.7	サヌカイト	
S102	T30	楔形石器	7	サヌカイト	
S103	T30	スクレイパー？	11.9	サヌカイト	一部欠損
S104	T30	石材	14.3	サヌカイト	一部欠損
S105	T30	太形蛤刃石斧	368.8		一部欠損
S106	T30	凹石	3390	花崗岩	一部欠損

表2　石器観察表

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもがさかいせき
書名	下笠加遺跡
副書名	県営邑久町圃場整備事業に伴う確認調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	１２２
編集者名	金田善敬
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL　086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL　086-224-2111
発行年月日	1997年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しもがさかいせき 下笠加遺跡	おかやまけん 岡山県 おくぐん 邑久郡 おくちょう 邑久町 しもがさか 下笠加	33 362		34° 40′ 40″	134° 5′ 50″	1996.11.11 ～ 1997.01.21	400m²	県営邑久町圃場整備事業に伴う確認調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
下笠加遺跡	集落跡	弥生時代 古代 中世	溝 土壙 柱穴 竪穴住居	弥生土器　土師器 須恵器　陶磁器 石器　鉄器	弥生時代中期の 石器製作遺構

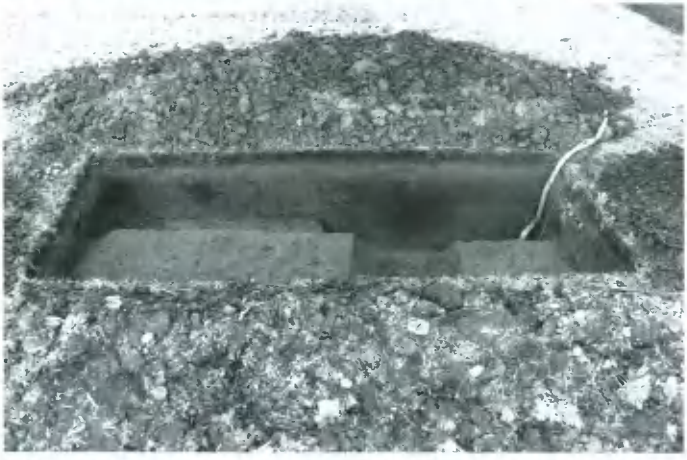
1．下笠加遺跡遠景(1)
（南東から我城山を
のぞむ）

2．下笠加遺跡遠景(2)
（東から）

3．下笠加遺跡遠景(3)
（南から）

図版2

1．T10（北から）

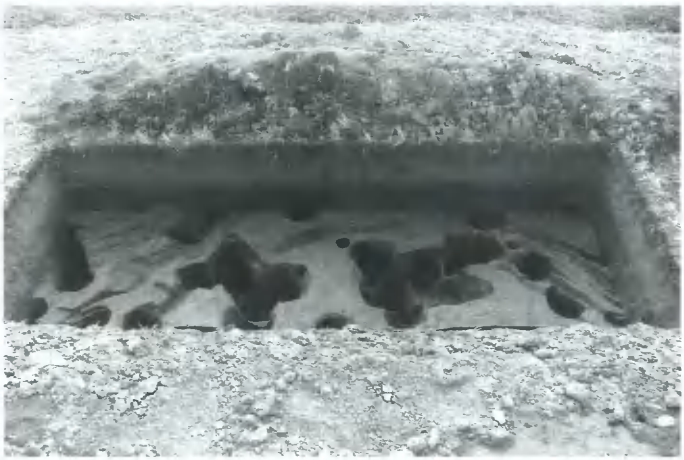


2．T16（南から）

3．T25（東から）

1．T26（北から）

2．T27北壁断面
（南から）



3．T30（北から）

図版4

1．T30
分銅形土製品出土
状況（西から）

2．T31（北から）

3．T38　井戸断面
（南から）

1．Ｔ９（西から）

2．Ｔ18北壁断面（南から）

3．Ｔ19北壁断面（南から）

4．Ｔ20　溝（南から）

5．Ｔ28　土壙２（南から）

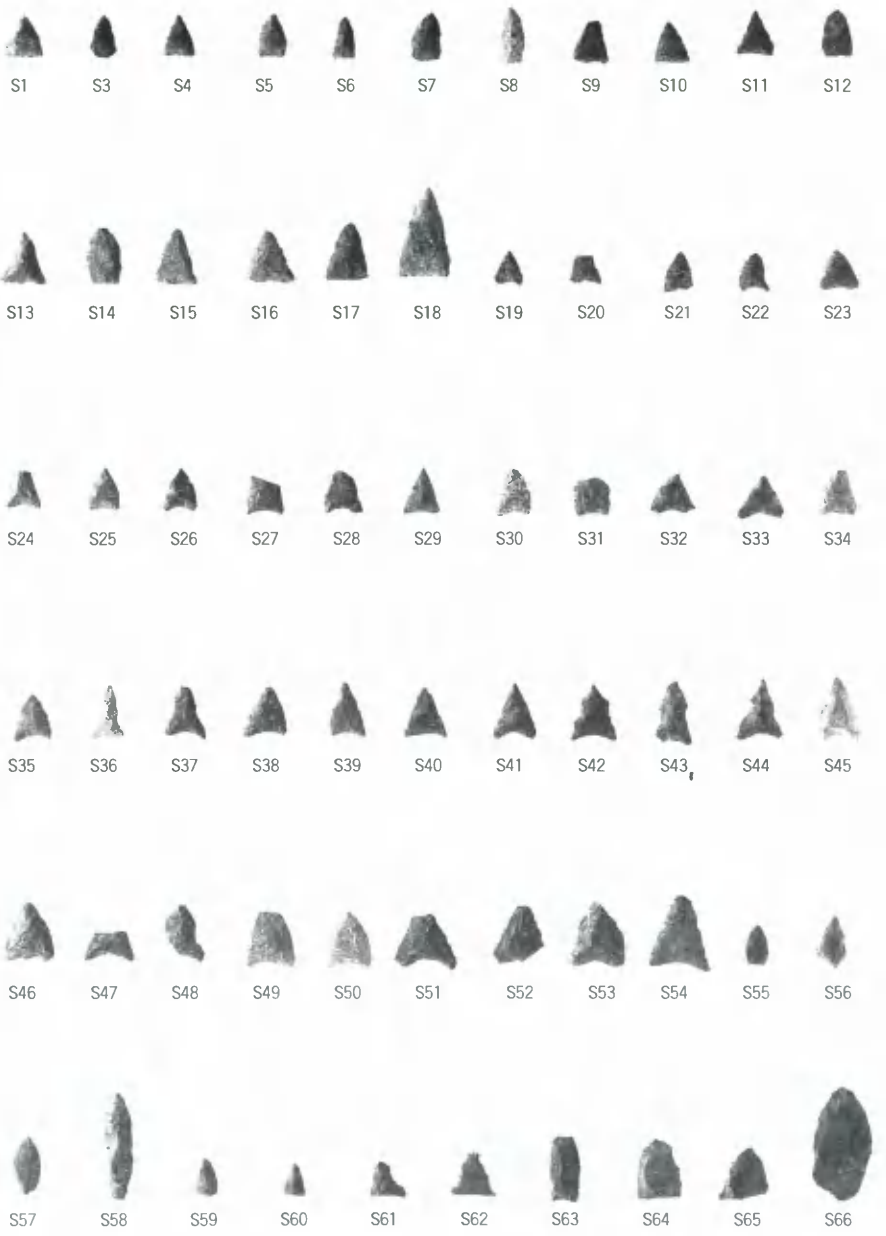
6．Ｔ30北壁断面（南から）

7．Ｔ40　土壙（南から）

8．作業風景（埋め戻し）

図版6

土器（1/3）・土製品（1/2）


S1
S3
S4
S5
S6
S7
S8
S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
S22
S23
S24
S25
S26
S27
S28
S29
S30
S31
S32
S33
S34
S35
S36
S37
S38
S39
S40
S41
S42
S43
S44
S45
S46
S47
S48
S49
S50
S51
S52
S53
S54
S55
S56
S57
S58
S59
S60
S61
S62
S63
S64
S65
S66

石器（1/2）

図版8

S67

S68

S69

S70

S71

S72

S73

S74

S75

S76

S77

S78

S79

S80

S81

S82

S83

S84

S85

S86

S87

S88

S89

S90

S91

S92

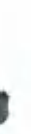
S93

S94

S95

S96

S97


S98

S99

S100

S101

S102

S103

S105

S106

I1

石器（1/2・1/3）・鉄器（1/2）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告122

下笠加遺跡

県営邑久町圃場整備事業
に伴う確認調査

平成９年３月20日　印刷
平成９年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　岡山県教育委員会
印　刷　旭総合印刷株式会社